Benvenuta Sig.a Dacia Maraini!

ダーチャ・マライーニさん
東京歓迎・交流会の記録

2024年6月12日　新宿・常圓寺

ダーチャ・マライーニさんを日本に迎える会・東京

目　次

（１）開催準備と結果のまとめ…… 3
【１】 歓迎・交流会のよびかけ
【２】 「プログラム・参考資料」の作成
【３】 歓迎交流会プログラム
【４】 参加者

（２）宮澤弘幸が眠る供養塔にお参り…… 6
＜参考＞　宮澤家遺骨　供養塔へ移設法要

（３）開会挨拶と歓迎の言葉…… 8
開会挨拶と歓迎の言葉　泉　定明
歓迎の言葉　唐渡興宜、福原恵美

（４）ダーチャ・マライーニさん講演 ……11
講演に先立って―ダーチャさんからの提起　　司会者・泉　定明
ダーチャ・マライーニさん講演全文（翻訳・黒澤多佳子）
歓迎の言葉　小宮まゆみ（POW 研究会）*POW＝Prisoner of War：戦争捕虜
望月紀子（文書）、川嶋均（同）、福島清（同）

（５）ダーチャ・マライーニさん「日本訪問記」 ……21
「日本へ“帰国”もう失くなった家」（翻訳・望月紀子）

（６）ダーチャ・マライーニさんを迎えて　感想と総括 ……25
伊藤　千尋・朝日新聞ＯＢ、ジャーナリスト
川嶋　　均・東京藝術大学
土肥　秀行・東京大学准教授
黒澤 多佳子・イタリア語通訳
寺沢　玲子・登山愛好家
村瀬　喜之・北海道大学ＯＢ
西里 扶甬子・ジャーナリスト
福島　　清・毎日新聞活版ＯＢ
＜総括に代えて＞　泉　定明・東京実行委員会代表

（７）マスコミ報道一覧…… 37

（１）開催準備と結果のまとめ

2024 年 2 月 23 日、東京・常圓寺で開催された北大ＯＢＯＧのつどいで、「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」名の「ダーチャ・マライーニの来日成功のため御支援をお願いします」と題した案内の配布があった。そこには来たる 6 月 11 日～20 日の日程と寄付の呼びかけが記されていた。

「スパイ冤罪事件」の被害者となった宮澤弘幸と接点があり、第二次世界大戦中の苦難を知るダーチャ・マライーニさんの来日は、再び戦争のきな臭さが強まっている日本の現状に警鐘を鳴らす意味から、きわめて意義のあることとして受け止められた。

そこで、「『宮澤・レーン事件を忘れない』北大・戦後世代をつなぐＯＢＯＧの会」が中心となって、6 月 12 日に予定されていた常圓寺墓参と歓迎交流会を成功させるべく準備を開始した。4 月 24 日に以下の 10 人で実行委員会を組織し、任務分担を決めて準備を進めた。

【代表】泉定明【実行委員】大我晴敏、平田更一、向山征哉、村瀬喜之、湯原 宏、黒澤多佳子、寺沢玲子、西里扶甬子、福島 清（敬称略）

【１】歓迎・交流会　参加のよびかけ

以下の「ダーチャ・マライーニさん歓迎・交流会」開催案内を作成し、メール・郵送で関係者をはじめ、広く参加を呼びかけた。

ノーベル文学賞候補のイタリアの有名作家、劇作家、詩人であるダーチャ・マライーニさんが6月に来日します。

ダーチャさんは、「スパイ冤罪事件」に絡められた北海道帝国大学学生・宮澤弘幸が、暗黒の時代に知的交流や旅行・登山などを共にしたイタリアのフォスコ・マライーニの長女です。

２歳から９歳までを日本で過ごし、終戦までの約２年間、名古屋の強制収容所で、あまりにも苛酷な飢えや寒さを経験する。フェミニズム、68 年の「異議申し立て」の旗手として時代を駆け抜けてきた作家です。

暗黒時代の日本での体験、そして文学者として活躍されているダーチャさんを知ってほしいと思います。

ダーチャ・マライーニさん 歓迎・交流会

○日時　２０２４年６月１２日（開場 12 時 30 分）午後１時～２時３０分

○会場　新宿・常圓寺　160-0023 新宿区西新宿 7-12-5　03-3371-1797
（地図：https://joenji.jp/about/?id=access　）

○会費　１０００円（学生は無料）

＜歓迎・交流会プログラム＞

① 開会あいさつ　泉　定明さん
② 「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」代表・唐渡興宣さん
③ ダーチャ・マライーニさん挨拶
④ 歓迎の言葉
　福原　恵美さん（宮澤弘幸さん姪）
　土肥　秀行さん（東京大学文学部南欧語南欧文学研究室准教授）
　小宮まゆみさん（ＰＯＷ研究会＝戦時下の敵国民間人抑留を研究）
　川嶋　　均さん（東京藝術大学講師、自由と平和のための東京藝術大学有志の会）
⑤ 参加者からの発言

主催「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京」

泉（090-4534-1375）、村瀬（090-4947-5393）、向山（090-4675-5483）
＊ご参加いただける方は、村瀬までご連絡をお願いします。

ダーチャ・マライーニさん紹介

◇両親とともに札幌へ

ダーチャは 1938 年 2 歳の時に、アイヌ文化研究のため北海道大学に来た父フォスコ・マライーニとともに来札しました。一家は北大構内の外国人教師官舎に暮らしました。当時、北大外国人教師官舎では「心の会」が発会し、外国人教師と学生たちが国籍、立場を超えて人間的な信頼を育んでいました。メンバーの宮澤弘幸とマライーニは、旅行、登山、スキーなどを共にし、大変深い親交がありました。

◇暗黒の時代

1941 年にフォスコ・マライーニは京大にイタリア語教師として赴任しました。1943 年イタリアが連合国に降伏すると一家は「敵国人」となり、名古屋の強制収容所（名古屋・天白寮）に収監され死と隣り合わせの厳しい生活となりました。口に出せぬような人間の浅ましさも経験しています。終戦後 1946 年、一家はイタリアへ帰国しました。帰国後、フォスコ・マライーニは日伊の交流に多大な貢献をしています。（この功績を記念してイタリア文化会館では、「マライーニ賞」を設けてします。ダーチャは、今回授賞式で挨拶を予定）

＊【参考文献】マライーニ一家の強制収容所での経験についての本が出版されています。
「ダーチャと日本の強制収容所」　望月紀子著　2015 年　未来社刊
「漫画ＥＮＤＯ」ペッペ作　　小学館刊　現在 1.2 巻発売中

◇戦後フォスコと宮澤が再会

北大では宮澤弘幸とレーン夫妻とが、1941 年 12 月 8 日いわれなき軍機保護法違反で検挙され、重刑が科せられました。宮澤は厳しい監獄生活で極度に衰弱、終戦後ＧＨＱ覚書で釈放されます。釈放後宮澤が唯一訪問したのは、楽しさを共有したフォスコのところでした。フォスコは宮澤の心身の酷い窶れ方に驚き、ショックを受けたと書き残しています。宮澤は病の為、釈放後まもなくして 1947 年 27 歳の生涯を閉じました。

◇ダーチャの文学者として

昨年秋には『VitaMia（わが人生）』を上梓しました。その中でこれまで語ることのなかった辛く苦しい日本での経験を「世界中に、あらゆる形の暴力と憎悪が再び溢れる今、それを証言しなければならないと思ったのです。そして自分の原点は日本でのさまざまな体験です。」と語っています。

これまでも、主にフェミニズムや反ファシズムに焦点をあてた作品を執筆してきました。

＊日本語に翻訳された作品
『不安の季節』（1970 年）、『バカンス』（1971 年）、『メアリー・ステュアート』（1990 年）、『シチーリアの雅歌』（1993 年）、『帰郷 シチーリアへ』（1995 年）、『イゾリーナ 切り刻まれた少女』（1997 年）、『声』（1996 年）『別れてきた恋人への手紙』、（1998 年）、『おなかの中の密航者』（1999 年）、『思い出はそれだけで愛おしい』（2001 年）、『ひつじのドリー』（2016 年）、『ある女の子のための犬のお話』（2017 年）
【映画脚本】：三人姉妹（1988）、ピエラ/愛の遍歴（1987）、未来は女のものである（1986）

◇ダーチャの今回の来日中の予定

ダーチャは、東京では父の親友であった宮澤弘幸の墓参と交流会、イタリア文化会館での「マライーニ賞」授賞式での挨拶、名古屋では強制収容された寺の訪問、旧友との再会、札幌では写真展、講演会などを予定しています。

【２】「プログラム・参考資料」の作成

ダーチャ・マライーニさんは、宮澤弘幸と接点があり、第二次世界大戦末期には、日本の軍国政府によって、敵国人とされて愛知県で抑留された。イタリア帰国後は、ノーベル文学賞候補となる作家として活躍されている。この機会にダーチャさんに関する資料をまとめて紹介することが必要であると考え、「プログラム・参考資料」（60ページ）を作成して、6 月 12 日当日、参加者に配布した。その＜参考資料　目次＞は以下の通り。

＜参考資料　目次＞

① ダーチャ・マライーニさん紹介
② ダーチャと日本の強制収容所　望月紀子
③ マライーニ家の受難　上田誠吉著
④ ノーベル文学賞にもっとも近い作家たち　青月社
⑤ フォスコ・マライーニ紹介　北大山岳部　ＨＰから
⑥ フォスコ・マライーニ写真展「東洋への道」
⑦ フォスコ・マライーニ写真展「魅惑の海女たち」
⑧ フォスコ・マライーニの死にちなんで　谷泰
⑨ アジア太平洋戦争下の民間人抑留　小宮まゆみ
⑩ 愛知県天白村抑留所
⑪「捕虜収容所・民間人抑留所事典」紹介
⑫「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」と伝え続ける活動

「プログラム・参考資料」に加えて、以下の資料を配布し、参加者の参考に供した。

① 「歓迎の言葉」全文（ダーチャさんには、イタリア語翻訳版を贈呈）
② 「知っていますか？　宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」パンフレット
③ 「幼児期のダーチャの写真と宮澤弘幸の短歌」（宮澤弘幸の遺品アルバムから）
④ 「ダーチャさんに事前に届けた７項目の質問」
⑤ 取材報道機関向けニュースリリース

＊撮影者名のある写真、10 頁の宮澤弘幸家族写真、29、30 頁の写真以外は福島清撮影。

【３】歓迎・交流会プログラム

11：00　受付・会場整理（大我晴敏、向山征哉、村瀬喜之、湯原宏）

12：00　ダーチャさん常圓寺着。福原恵美さんの案内で、宮澤弘幸が眠る供養塔に献花

13：00　ダーチャさん歓迎交流会開会

司会者挨拶・歓迎の言葉

泉　　定明　「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京」代表

歓迎の言葉

唐渡　興宜　「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」代表

福原　恵美　宮澤弘幸・姪

ダーチャ・マライーニさん講演　　通訳・黒澤多佳子、渡辺祥子

歓迎の言葉

小宮まゆみ　ＰＯＷ研究会会員

14：30　記者会見（会場内にて）

15：00　閉会

【４】参加者

宮澤家	1 人
ダーチャ・マライーニを日本に迎える会	2 人
ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京	5 人
大学研究者	7 人
学生（東大、東京外語大、東京藝大）	10 人
ＰＯＷ研究会	8 人
毎日新聞ＯＢ	4 人
「宮澤・レーン事件を忘れない」北大・戦後世代をつなぐＯＢＯＧ会	16 人
一般参加者	4 人
マスコミ関係者（ＮＨＫ、毎日、東京、朝日、北海道、読売他）	20 人
合計	78 人

（２）宮澤弘幸が眠る供養塔にお参り

撮影・川嶋　均

6 月 12 日正午、東京・常圓寺に着いたダーチャ・マライーニさん。福原恵美さんの案内で、宮澤弘幸と家族の５人が眠る供養塔にお花と水を供えて、お参りした。

＜参考＞　宮澤家遺骨　供養塔へ移設法要

新宿・常圓寺にあった宮澤家墓地には５人（宮澤俊光・長男 1918 年 8 月 20 日死去 0 歳、宮澤弘幸・次男 1947 年 2 月 22 日死去 27 歳、宮澤雄也・父 1956 年 4 月 14 日死去 66 歳、宮澤晃・三男 1964 年 4 月 12 日死去 40 歳、宮澤とく・母 1982 年 1 月 28 日死去 87 歳）が眠っていた。2023 年 4 月 12 日、墓地を管理されてきた広島在住の福原恵美さん（晃・長女）が施主となって同寺内にある供養塔へ移設し、法要をおこなった。

左の墓から５人の遺骨を取出し、小さな骨壺に入れて左の供養塔地下に納骨した

参列者：福原恵美さん（宮澤晃さん長女、広島在住）夫妻＝中央のお二人。左から水久保文明、大住広人、泉定明、福島清、山野井孝有、湯原宏、大我晴敏（北大と毎日新聞ＯＢ）

（３）開会挨拶と歓迎の言葉

開会挨拶と歓迎の言葉

泉　定明＝「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京」実行委員会・代表

只今から「ダーチャ・マライーニさん歓迎・交流会」を開催します。

私は、司会をつとめさせていただきます北海道大学卒業生の泉定明です。ダーチャさんを迎えて、皆様と共に意義あるひとときになりますよう願っております。

私たちは、戦前の北海道大学で学生と外国人教師たちの交流会「心の会」に参加していた宮澤弘幸さん達が、スパイ冤罪被害者として検挙された 12 月 8 日と、獄中で患った病の為釈放後間もなく亡くなった命日の 2 月 22 日に毎年集まって、権力による間違った人権侵害が、今後起こらない様に、伝え続ける活動をしてきました。

ダーチャさんの父上フォスコさんも「心の会」のメンバーであり、宮澤さんとは心許しあえた無二の親友でありました。その時代、ダーチャさんも北大構内の外国人官舎に住み、「心の会」の学生、教師たち、そして近所の子ども達と親しく楽しい生活を送ったと聞いています。

戦時中ダーチャさんとご一家が被った酷い待遇ならびに戦後のご活躍については、本日皆さまのお手元にお届けした「プログラム・参考資料集」で紹介しておりますので、それをご覧ください。また、この後、歓迎の言葉をいただく皆さまのお話で、理解を深めていただきたいと思います。

ダーチャさんをお迎えした意義について、一言述べさせていただきます。

ダーチャさんが『羊のドリー』という寓話集に収録した「くつに住む一家」では、互いに仲良くしていた家族同士が、つまみ食いをちょっとした子どもを殺してしまい、互いが相手の家族を攻撃し始め、争いは次々に拡大と残虐さと増してゆきます。皆殺し迄考えるようになった憎しみの果てに見たものは、自分の息子が相手の姿に変わり果て、それをも殺そうとする父親は、銃へと変身してしまいます。「狂気と憎しみは、自分をも変身させてしまう」という物語です。争いは終わりが見えず、人々が自然と興奮し、悲惨さが見えなくなる状態を描いています。

ご承知のように、ウクライナで、ガザで、多くの人々の命が奪われています。人が人でなくなる「戦争」は、まだ続いています。「天井の無い檻」の中に押し込められ追い詰められ、飢餓の苦しみを味あわされているガザの子どもたちは、「収容所での残酷さ」を体験された当時のダーチャさんと同じ子どもたちであります。

日本でも他国でも危険な状態が目につきます。特に、日本国民の気質は同調や曖昧さを求めるので、不穏な世の中で人々が空気を読んでいるうちに、権力にいつの間にか自由を奪われ易いと思います（笑顔のファシズム)。世間に流されない自分の軸を確立することが、宮澤弘幸やマライーニさん一家が受けた悲惨な体験が、再び現実のものにならないためにも重要だと考えています。

フォスコさんは「遺書」で、「偏見から自由な『常在する啓示』というものがあった。それは平和と安心を見いだせるものであり，聴く、見る、読む中に、いつも示されている。教条主義的な崩壊現象を回避させる考えである」と言っています。すぐそばにあるのです。

会場の皆様、今日のダーチャさんとの交流会が、過去を知り現在に眼を向けて、誠実に理想や夢を実現することをじっくり見つめる機会となることを願って開会の挨拶とします。

では、プログラムに沿って、進めていきます。

最初に、「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」の代表である唐渡興宣さん、お願いします。

歓迎の言葉　　唐渡　興宣＝「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」代表

私は「宮澤・レーン事件を考える会」の代表幹事、そして「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」の呼びかけ人の唐渡興宣です。

文化人類学者で、宮澤弘幸と年齢も近いことで最も親しくかつ最も理解していたフォスコ・マライーニの娘さんであるダーチャは、宮澤君と接触したことのある数少ない生き証人です。ダーチャはノーベル文学賞候補にも挙がる著名な作家です。

昨年の8月、私たち「考える会」はダーチャの作品を精力的に翻訳されている望月紀子さんを介して、ダーチャに「考える会」の活動を知らせ、それに対して何らかのメッセージを頂きたく手紙を出しました。その時、「もし、日本に来ることができましたら私どもは歓迎いたします」と伝えました。このやり取りの中で、ダーチャは日本に行きたいとの意向を表明され、私たちは「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」を結成し、ダーチャを迎える運びとなりました。

ダーチャは1938年2歳のときに、アイヌ文化研究のために北海道大学に来た父とともに来札しました。一家は英語教師レーン夫妻らが住む外国人教師官舎で暮らしました。外国人教師官舎では「心の会」が開かれており、そこで外国人教師、北大生、留学生（中国）が国籍を超えて人間的信頼を育み、希望を語り、学生たちは誠実を胸に刻んでいました。「心の会」は多様性（diversity）を包摂（inclusion）する先駆的なものでした。この「心の会」における交わりが特高・軍部の逆鱗に触れることになり、レーン夫妻と宮澤君は軍機保護法違反で検挙され、重刑が科せられました。宮澤君は拷問と厳しい監獄生活で結核となり、戦後GHQの命により釈放されましたが、1947年27歳でその生涯を閉じました。

私達は、こうした戦争による悲劇的な事件があったことを語り伝え、再び繰り返すことのないよう記憶に残すために、外国人教師官舎跡に案内板とモニュメントの設置を要請しています。ダーチャさんの北大訪問を機に、この願いが叶うことを期待しています。

1941年フォスコ・マライーニは京大でイタリア語の教師となりましたが、イタリアが降伏し、三国同盟から離脱するや、マライーニ一家は名古屋の外国人抑留所に収容されました。この収容所の抑留者たちは、飢餓状態で死と隣り合わせの生活を余儀なくされていました。それは、看守をしていた警官たち

が抑留者らの食料を盗んでいたからです。それに対してマライーニたちはハンガー・ストライキでもって抗議し、マライーニは警官たちの前で指を切り落として抗議の姿勢を示しました。

昨年秋、ダーチャは『わたしの人生』を上梓しました。長い間書こうとして書けなかった収容所生活の体験でした。それがダーチャの出発点でした。この収容所生活を起点にダーチャは様々な思想、文学を遍歴して今、偉大な作家となって私たちのもとに帰ってきました。皆さんとともにダーチャを迎えましょう。

歓迎の言葉　　福原　恵美＝宮澤弘幸さんの姪

撮影・川嶋　均

福原恵美と申します。

私は弘幸の弟、宮澤晃の娘で、一人っ子でしたので、宮澤家の血筋は私だけです。嫁ぎまして、広島に 50 年住んでおります。今朝、広島から参りました。

ダーチャ様、そして沢山の皆様、お墓にお参り頂き、本当にありがとうございました。

弘幸伯父の出来事は、私の生まれる前の出来事で、私は何も知らずに育ちました。家でこの話はタブーだったのでしょう。父から兄・弘幸は優しく、頭が良く、思いやりのある素晴らしい兄貴だったと何度も聞かされていました。

父は、出陣学徒壮行大会で壮行の辞を読む予定でしたが、その朝急遽、国家犯罪者の弟であるからと交代させられました。悔しかったと思います。このことは本人が家族にも語ることなく、相当後日まで、家族も知りませんでした。

父は、死の特別攻撃飛行の順が回って来た時、体調が悪くなり代わってもらい、その後終戦でした。死ねなかった我が身を悔やみ、恨みながら、友を偲びながら終戦の日は毎年、苦しみの深酒をしていました。

39 歳で白血病で亡くなりました。長崎の原爆投下直後偵察飛行の為、風防を外して乗っていたのが原因だと思っています。

真面目な一般人が戦争の犠牲に二度とならない為に、皆様どうかお力を合わせましょう。

最後になりましたが、ダーチャ様の日本滞在が、有意義なものでありますように、お祈り致します。

宮澤家一同。
右から母・とく、三男・晃、次男・弘幸、父・雄也、長女・美江子
＝1938（昭和 13）年 1 月撮影

（４）ダーチャ・マライーニさん講演

講演に先立って――ダーチャさんからの提起　　司会者・泉　定明

今回の講演要請に先立って、ダーチャ・マライーニさんから、以下のメールをいただきました。

「何を話すかについては、皆さんが自由に選んでもらって構いません。聞きたいことは何でも言ってください。ただ、宮澤弘幸さんについては、家族ぐるみの親しい友人ではありましたが、どうしても子ども対大人の関係に限られます。彼について記憶しているのは、親切な態度、愛情深いところ、寛大なところ、よく一緒に遊んでくれていたことなどです。私は幼かったので、政治や他の重要な事柄について語り合うことはできませんでした。

ですから、今回どのような話をするか判断するために、どういう方々が聴きに来られるかを知る必要があります。皆さんが深めたいと考える関心事は何でしょうか。1940 年代の、私たち家族の日本での体験でしょうか？　または、主に強制収容所での体験でしょうか？いずれにしても、会の方で聞きたいトピックを選んでもらい、教えてください。どんなことでも話すつもりです。」

＊

このメールからは、講演内容が聞く人にとって有意義であるようにしたいとの、ダーチャさんの思いやりが伝わってきます。そこで事前に７項目の質問を送り、当日さらに追加しました。それを元にしたダーチャさんの講演全文を紹介します。

ダーチャ・マライーニさん講演　全文　　（翻訳・黒澤多佳子）

まず始めに、ご来場いただき、私の話に耳を傾けてくださる皆さんに感謝します。私は今感動しています。日本は私の幼少期そのものであり、８年間を過ごした場所です。その体験は私の将来を築くうえで、とても重要なものとなりました。日本は私のアイデンティティの一部だと思っています。アイデンティティとは一枚岩ではなく、分脈を持ち得るものだと思いますし、私のルーツの大事な一つが日本にあると感じています。

日本では未翻訳(2024/6/12 時点、のち 11 月に邦訳発行)**ですが、「Vita mia」（わたしの人生）を書き終えられて、最も訴えたかったこと、今回の日本訪問で、最も確認したいことは。**

日本の話をしてほしいと、あちこちの学校に招かれるので、私は頻繁にイタリア中の学校へ出向きます。この本は多くの学校で反響を呼んでいます。

どこでもまず聞かれるのは、一体どうしたらそんな酷い扱いを受けた国の友人でいられるのか、ということです。

それは、強制収容所にいながらも、一般の日本の人たちは私たちの味方だということを、幸運にも発見したおかげです。幼いながらも体験したことですが、実際の敵は私たちを収容所に閉じ込めている看守たちで、収容所の外の人たちは皆、私たちの味方だったのです。

大人になってから熟考して分かったことがあります。どこでも起こることだと考えますが、人間は他者に対して絶対的な力を手にすると、無意識にサディスティックな面を引き出してしまうということです。収容所で、私たちは完全に看守たちの手中にありました。彼らは古い軍隊主義思想の人々で、私たちを祖国の裏切り者とみなし、どんな残酷な扱いをしてもよいのだと考えていました。けれども収容所の外ではそうではありませんでした。

収容所に訪ねて来てくれたのは、日本人の友人だけでした。オカアチャンと呼んでいた乳母は風呂敷いっぱいに食べ物を持ってきてくれましたが、看守らは全部捨ててしまったうえ、彼女は警察で拷問を受けました。私たちがスパイだと証言しろ、と脅されたのですが、彼女は拒否しました。そんなはずはない、と。このように、軍国主義体制と実際の市民がいかに違うかを、私は理解したのです。だからこそ私は日本の方々と真に良好な関係を持ち続けていられるのです。

ダーチャさんの文学は「閉じ込められた領域」からの脱出・解放、フェミニズム、反ファシズム、ジェンダー、弱者に寄り添う、などのテーマが多いように見受けます。これらはダーチャさんの何の体験、思いから書かれたのでしょうか。

私たちが名古屋の収容所送りとなったのは、サロ共和国への従属に同意しなかったからです。サロ共和国とは、イタリアの北部でナチス・ファシストと同盟を続けた国家です。つまりは、はっきりとした政治的選択でした。私の両親は、政治に熱心だったわけではありませんが、一つのことは絶対に容認しませんでした。それは人種差別主義です。

サインしなければ収容所行きとなると言われ、父と母は別々に（母はこれを必ず強調しました）署名を求められ、それぞれが拒否しました。あなたは小さな娘が３人もいるからサインするでしょう？と官憲たちは母に言いましたが、母は拒否しました。自らの信念である民主主義への忠誠を示したのです。官憲らは「ならば裏切り者の子らは同様に裏切り者とみなす」と言いました。当時私は６歳、末の妹は２歳でしたから、理不尽にもほどがありますが、これが戦争のロジックでした。

ダーチャさんは「誰もが持つ暴力性を抑制する倫理観、読むこと、書くことといった文化活動の役割」について語っておられます。文化の持つ重要性についてお話しください。

私は一つの前提から話し始めたいのですが、人間は皆等しく、善と悪の両方を内面に備えています。フロイトも同じことを言っています。エロスとタナトス（編集注：ギリシア神話に登場する死そのものを神格化した神）と呼ばれるものです。エロスとは、いのち、芸術、美しさ、生きる喜びへの愛です。タナトスとは、死に向かうもの、自分自身も他者をも破壊する方向に向かうものです。私も含め、すべての人がこの二つの能力を備えています。

このタナトス、つまりネガティブな方をコントロールできるのは、教育、文化、宗教、思考、勉学、読書、哲学といった、「文化」と一括りにできるものです。これらが私たちの持つタナトス、つまりネガティブな側面を抑制することができるのです。こうした「文化」によって、我々は自分の内に持つネガティブな面を変えていくことができる。より崇高なものに変え、昇華させる。そうして、破壊の力を建設する力に変えてゆくことが可能だと思うのです。それは、なかなか容易にできることではありませんが、真に試みる価値があるものです。

ナチス・ファシズムに従属しないという選択により、たくさんの苦しみを受け、命を危険に晒しましたが、両親の選択は、人としての真の模範であったと言えます。私の人生に多大な影響を与えた決定的なものでした。

宮澤弘幸さんの記憶が残っていたらお聞かせください。彼との出会いやダーチャさん自身が楽しい幼少期を送った北大の住まい跡に、モニュメントを作りたいという考えを、どう思われますか。

宮澤さんと知り合った当時私は幼い子どもでしたが、彼はよく家に遊びに来ており、とても身近な存在でした。子どもに対してとても忍耐強い人だったという印象を私は持ちました。私や妹たちはおてんばで、跳ね回ったり木に登ったりと、賑やかに遊んでいましたが、彼はいつもにこやかでした。 また母に対する愛情やリスペクトも目にしましたし、父とは特にスポーツを通じた良い友達でした。一緒に自転車で出かけたり、たくさんの高峰を目指して登ったり、スキーに行ったりしていました。強い友情で結ばれているのが分かりましたし、彼は家族同然の一人でした。彼が投獄されたことを知った時、私たちはすでに札幌を後にして京都にいたのですが、皆非常に心を痛めました。家族も同然だったからです。全くもって理解しがたい嫌疑であり、あり得ないことだと感じました。

日本でも世界でも軍事強化の動きが強まっています。イタリアでも世界でも右傾化が強まっています。

現在は、非常に困難で危険な状況にあります。ウクライナ、ガザでの戦争といった個別の状況とは別に、世界全体で、何よりも文化的な意味での分断、対立があるという印象を持っています。それがひいては軍事紛争にもつながっています。

文化的な対立は、民主主義を信じる人たちを分断させるものです。民主主義とは様々な機関があって、政府、警察、司法、学校、医療などが、互いに独立し、分立していなければなりません。これは民主主義の原理原則です。一方で、民主主義は役に立たないと考える人たちがいます。色々な機関が分離共存するよりも、権威主義のヒエラルキー的考え方に基づいた政治、一人の強い力を持つ者が意思決定をする政治の方がうまくいく、という考え方です。今まであまり目立たなかった、この二つの立場が今、徹底的に対抗し合っているように感じます。ですから世界全体が今、この二つの立場に直面しているという印象があります。これが問題なのです。確かに、経済的、地政学的な原因もあるでしょうが、すべての根底には文化的対立があり、そこから衝突が引き起こされているのだと、私は考えます。

こうしたことは当然、社会生活、家庭生活の在り方にも言えることです。テクノロジーは世界を深刻なほどに変えました。家族のあり方も変わり、性的な関係、ヒエラルキーのあり方も変わり、経済的な関わり方、仕事での関わり方も変わりました。さらに重大なのは、民族移動の問題です。日本ではあまり強く感じられていないと思いますが、ヨーロッパにおいては今や最大の問題の一つです。干ばつや独裁政治から逃れて、アフリカや中東から欧州へと流

れ込んでくる大勢の人々を、どこに滞在させればよいかも分かりません。大きな問題です。アイデンティティの問題もあります。

このように世界は変化します。では、変化を前にした時、どうすべきか。ここに、やはり右派と左派での違いが起こります。右派は「世界を止めよう。変化は止めよう。変化は受け入れない。」これが右側の態度です。私はそれが良いか悪いかの議論はしませんが、こういうのが右派です。左派は「変化を検討しよう。そして何ができるか検証しよう。いずれにしても変化を受け入れよう」と。このように、異なる文化的、社会的態度があります。ここからも対立、衝突が起こります。紛争はここからも生まれます。

大きな変化を前に、どうすべきなのか。気候変動もその一つでしょう。我々はどうすべきなのか。変化を否定するのか。国境を固く閉じて小さな国にして、自分たちだけの判断で行動していくのでしょうか？　あるいは新たな関係を築いて、国と国の間に橋を架けるのでしょうか？　決して簡単なことではありません。しかしまさにこれが大きな問題だと思っています。地域的な紛争・戦争は別として、「変化」に対してどのような態度をとるのか、これが大きな課題だと思います。そこから、私たちがいかに生きるのか、という意思決定が生まれるのです。

もう一つ、付け加えたいことがあります。先ほどからお話している変化の一つで、伝統主義者たちにとり、最も気に食わないものは、女性の解放、女性が専門的職業へ進出していることです。一部の文化、政治的考え方、国家にとっては、決して容認できない変化です。こうしたことも、衝突を引き起こします。

「戦時中の日本」について、今振り返ってみて、最も印象的だったことは何でしょうか。

私が最も印象を受けたことは、私たちが自らの肌で体験した「狂気」と「良識」の違いです。

名古屋、または廣済寺の周辺の農家の人々は、完全に私たちの味方でした。私は小さかったので（看守たちに）見つからずに収容所から抜け出し、近隣の農家で蚕作業を手伝いました。子どもの手でも、桑の葉をえり分けたりできたのです。何時間も作業をして、終わりにはジャガイモ一個や大根一本をもらい、こっそり収容所に持ち帰って皆で分けました。このように農家の人たちは皆本当に親切で、私を助けてくれたのです。本来ならば私のことを（看守に）言いつけなければいけなかったのです。収容者たちと関わることは固く禁じられていたのに、本当に素晴らしい体験ですが、農家の人たちは皆私たちの味方でした。彼らはもう戦争に嫌気がさしていたのです。そして私たちのことを敵だとみなしていませんでした。彼らにとっては、私たちは敵ではなかった。このことは私には大きな意味がありました。

一方で、収容所の看守たちは、責任者の粕谷を始め、先に言ったように非常にサディスティックでした。例えば彼らはベランダで食事し、魚の頭や腐ったみかんなどを投げ棄てて、私たち子どもが飛びつくのを笑って見ていました。あまりの空腹に、魚の骨や腐ったみかん、そんなものにさえ私たちは飛びついていたのです。これはサディズムです。

こうした、私たちに対する愛情あふれた人々と、看守たちのサディズムという両極面は、最も印象的なものでした。非常に印象的でした。私が先に言ったように、絶対的支配力は、常にサディズムを生み出すのだということを分からせてくれました。収容所だけの話ではなく、人と人の関係においてもそうですが、一方が他方に対して絶対的な力を持つ時、人はサディストになります。

収容所における心理状況を物語る例を挙げます。私たちは飢餓状態でひどく衰弱していたので、歩くのさえ困難な状態でしたし、髪の毛も抜け落ちたり、歯茎から血が止まらなかったりしていました。中庭には壁に沿って丸く置かれたベンチがありましたが、壁にもたれて座るのは禁止でした。でも、何のための禁止でしょうか。サディズムです。誰かがもたれようものならすぐに看守が棒を持って飛んできました。壁には一切もたれることができなかったので、

衰弱していた私たちはせめて互いにもたれ合っていました。サディズム以外の何物でもありません。

もう一つのサディズムの例です。イタリアから手紙が届いていました。父の母は病気で、やがて亡くなるのですが、父は母親にとても懐いていたので、消息を心待ちにしていました。手紙が届くと、看守たちは詰所のテーブルの上に置き、「一週間たったら渡す」と言い、私たちは辛抱して待っていました。一週間後取りに行くと、私たちの目の前で手紙を破り捨てました。これはサディズム、相手に苦痛を与えることを悦ぶ、ということです。このようなエピソードは山ほどあります。

私が思うに、強制収容所とか、刑務所というのは、人間の一番邪悪な感情を生み出すところです。このような環境の産物として、まるでキノコのようにサディズムが発生するのです。だからこそ、強制収容所は無くす必要があり、恐らく刑務所も変えていく必要があります。こうした環境は、一人または数人の人間が、他の全く無力な人間に対して絶対的支配力を持つという状況を生み出す要素を、当然のように備えているからです。

もう一つエピソードを付け加えたいのですが、看守たちに対して、唯一功を奏した抗議がありました。それは皆さんもご存知の、古くからのサムライ的慣習ですが、私の父の行った「指切り」（指詰め）です。私たちのいかなる抗議行動もうまく行きませんでしたが、私たち子どもが飢えのために瀕死の状態になっていたので、父は憤慨し、斧を取り上げて小指を切断し、看守の粕谷に投げつけました。彼は返り血を浴び、大騒ぎとなりましたが、これはうまくいきました。日本の文化をよく知る人の、文化人類学が功を奏したのです。実際、１週間後に粕谷は小さなヤギを一匹連れてきて、1 日 20～30g 程度のミルクを出し、多くはなくともタンパク質が豊富で、私たち家族を救ってくれました。

もう一つの珍妙なエピソードをお話したいのですが、ある朝、看守らは突然収容所から姿を消しました。私たちは何も聞かされず、一体何が起こったのか分からなかったので、一人が周囲の農家に様子を聞きに行きました。彼はカンガルーのように飛び跳ねながら戻ってきて、「戦争が終わったんだって、終わったんだ！」と言い、私たちは抱き合って喜びました。午後になると農家の人たちの一群が収容所にやって来るのが見えました。何をしに来るのか分からなかったので、私たちはやや不安にもなりました。彼らは何を求めて来るんだろう？と。おかしなことですが、彼らは「天皇陛下が素晴らしい演説をした。終戦となったことは分かったが、あとは古めかしい日本語で理解できなかった」というのです。これは素晴らしいことだったと思います。日本の人たちがイタリアの収容者のところにやって来て、このイタリア人たちはほぼ皆が日本文化に通じた研究者たちだったのですが、天皇が何と言ったかを尋ねたわけです。珍妙かつ逆説的なことではありませんか。でも素晴らしいひと時でした。皆で抱き合って喜んだのでした。あれは、日本とイタリアの偉大な出会いの瞬間でした。日本の古語を知るイタリア人がいて、天皇の言葉が理解できなかった日本人たちがいたという、とても興味深い場面だったわけです。

廣済寺の近くにあった廣澤寺のオランダ人抑留者の子どもたちと交流はありましたか？

私たちは他の収容所については全く何も知らず、遠いところに外交官たちの収容所があったことも後で知りました。私たちは閉じ込められ、情報は全く入ってきませんでした。これは過酷なことです。戦況が終わりに近づいているのか、勝っているのか、負けているのか、一切分かりませんでした。「戦争に勝ったら、お前たちの喉を掻き切ってやる」と凄む官憲もいました。幼い女の子の感じた恐怖を、皆さんはお分かりになるでしょう。でも、私たちは（連合国側が）勝ちつつあるのか否かは知らず、何も分からない闇の中にいました。

収容所での日々で、最も素晴らしかった時間、その時だけは飢えを忘れさせてくれたのは、父と母が私たちの「学校」になってくれたことです。もちろん本も何もありませんでしたが、収容所の中庭にあった桜の木の下で、父と母が、算数、イタリア語や

歴史、地理などを教えてくれました。その時だけは、ほんの少し飢えを忘れることができた一番美しい思い出です。絶望的な飢えは、皆さんはご存知ないと思いますが、すでに衰弱した肉体をさらにむしばむものです。寄生虫が体の外側からも内側からもむしばむのです。

私にとってイタリアはエキゾチックなところでした。これは逆説的なことですが、私はイタリアを知らなかったからです。1 歳半で離れたので、イタリアを知らなかったのです。イタリア人にとって日本はエキゾチックな国ですが、私にはイタリアがエキゾチックだったのです。こうした経験から理解したのは、世界に対する視点がいかに、自分がどこにいるか、どういう立場にいるか、他の文化とどのような関係をもっているかによって条件づけられる、ということです。こうしたことを子どもの時から学びました。大きな教訓でした。

今日は宮澤弘幸さん思い起こす日であり、不当な理由で投獄され、拷問を受け、死に至らされた一人の人を思い起こすために、一言付け加えさせてもらいます。こうしたことは今も世界中で起こっていることです。このようなことが起こるのは、人に対する信頼、リスペクト（尊敬）が、サスペクト（疑う、猜疑心）にとって変わる時です。これは典型的な戦争の前触れです。疑うということ。宮澤さんはこうした戦争の前兆である、恐ろしい「疑いの空気」の犠牲者なのです。

何としてでも、疑うことを避けましょう。疑いは大変危険なものであり、完全に邪悪なものだからです。

（以下は、講演後になされた質問と回答）

土肥秀行・東京大学文学部准教授　講演、ありがとうございました。時間の制約があることは承知していますが、今日の講演に 11 人参加している東京大学の学生を代表して、女子学生が質問させていただきます。

東京大学学生（女子）　世界には色々な問題が起こっていますが、ダーチャさんは私のような若い女性に何を期待しますか？

ダーチャ　素晴らしい質問をどうもありがとう。答えるのは容易ではありません。この質問は幅広いものだからです。私に言えることは、できるだけ情報を得ることです。できるだけ多くのニュースソースを持つことです。一つの情報源のみに固めてしまわないことです。メディアは時に情報を歪め、フェイクニュースを流すこともあると、頭に入れておくことです。

テクノロジーの今日の大きな問題は、そうしたフェイクニュースを大変な拡散力を持って広めてしまえること、そして世論に影響を与えてしまうことです。国によってはあえてそれをしていたりします。ですから、複数の情報源を持つこと。自分たちの未来を創っていくために、若者にとってはそれが重要なことだと思います。

＜歓迎の言葉　続き＞

私はあなたに謝りたい気持ちです　　小宮まゆみ＝ＰＯＷ研究会

撮影・高川邦子

ダーチャさん、こんにちは。ＰＯＷ研究会の小宮まゆみです。

今から 30 年ぐらい前､私は戦争中に日本で抑留された外国人のことを調べていました。石戸谷滋さんの『フォスコの愛した日本』という本を読んで、私は初めてダーチャさんのことを知り、その後豊田市の廣済寺に行って、ダーチャさんが抑留されていた頃のお話を聞き、お寺の本堂も見ました。ダーチャさんの姪ムージャさんの映画も見ました。

また北海道から九州まで、日本各地の抑留所を調べ歩きました。分かったことは、日本では抑留の対象とする外国人を、始めは成人男子だけ、次は女性でも教師や宣教師は抑留、そして海外から連行した外国人は秘密にするため抑留、イタリア人は敵国になったから抑留と､次第に拡大していったことです。その結果延べ 1200 人もの外国人を収容し､そのうち 50 人が抑留中に命を落としました。

ダーチャさんたちイタリア人の待遇は特に過酷なもので、殴る蹴るの暴力は無かったものの、食料の配給を極端に減らすことで飢餓に陥れて苦しめたのです。名古屋の天白寮では、水っぽいごはんがわずかな量与えられ、配給されるはずの野菜も肉も卵もその多くを警察官が持ち去ってしまったそうです。豊田市の廣済寺では、小麦粉を水で溶いて煮た、でんぷん糊のようなものが食事だったそうです。そんな状況に耐えて､よく生き延びてくださったものと、ダーチャさんの強さに、心から敬意を表します。

今日こうしてダーチャさんにお会いできた今、私はただあなたに謝りたいという気持ちです。私は戦後の生まれで、あの戦争に対し責任があるとは言えません。それでも一人の日本人として、謝りたい。Dacia, I would like to apologize to you. I am so sorry about all the pain, the fear and the hunger you had to go through. I am very grateful that you survived. 辛い思い、怖くてひもじい思いをさせてごめんなさい。生き延びてくれて本当にありがとうございました。

神奈川県では、開戦と同時に横浜市内に神奈川第 1 抑留所が設けられました。抑留された人のほとんどは、日本を愛し日本の教育や文化に貢献した人たちでした。 抑留所は戦争が激しくなった 1943 年、北足柄村の山の上に移転させられ､そこで 53 人のうち 5 人もが、飢えと寒さと医療が無いために亡くなったのです。せめてこの歴史を忘れないように語り継ごうと、2019 年に「神奈川第 1 抑留所を語り継ぐ会」が結成され、毎年抑留所跡に地元の人々や抑留された方の遺族などが集まって、お墓に花を捧げています。

スパイ容疑で捕らえられた宮澤さんの事件も、ダーチャさんなど外国人の抑留も、戦争による自由と人権の侵害という点では同じだと思います。ダーチャさんが来日してくださったことで、北海道の宮澤レーンの会と私たちＰＯＷ研究会が、こうして初めて出会いました。二度と戦争を起こさない力になるように、これからも私たちは仲間を広げ、活動を続けていきたいと思います。ダーチャさん、皆さん、今日はどうもありがとうございました。

＜以下の３人の「歓迎の言葉」は、時間の制約で割愛されましたが、原稿が用意されていましたので、発言された４人と合わせ、全文をイタリア語に翻訳してダーチャさんに贈りました＞

ダーチャ・マライーニさんのこと　　望月紀子＝イタリア文学者

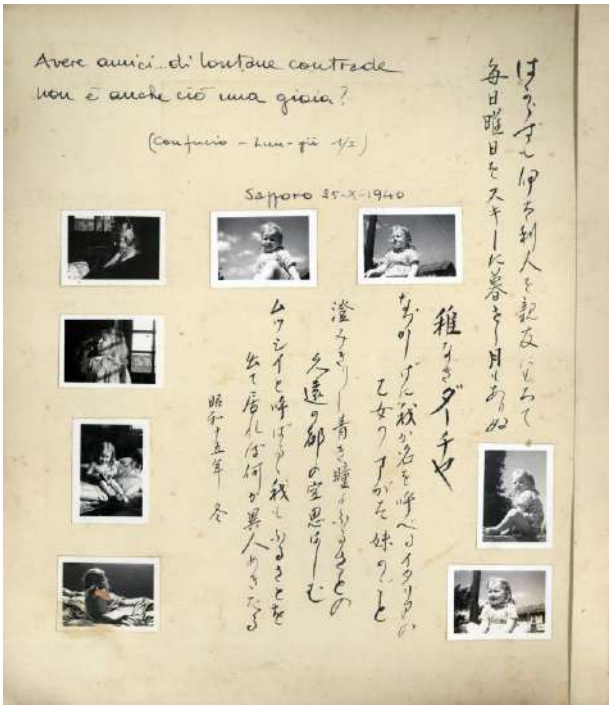
ダーチャ・マライーニさんの本の翻訳者の望月紀子です。簡単にダーチャさんの紹介をします。この度の、「宮澤・レーン事件を考える会」のご招待による来日は早くに決まっていましたが、最近になって突然、足の指の手術をされて、ドクターから長旅を禁じられ、国内やヨーロッパ各国からの招待はみな断ったけれど、日本へは絶対に行くと言ってくれました。日本へのこの特別な思いはどこにあるのか、それを少しお話しします。

彼女は 1938 年、お父さんのフォスコ・マライーニがアイヌ文化研究のために北海道大学に留学したために、2 歳になったばかりで日本に来ています。祖父は著名な彫刻家ですがファシスト党幹部で、息子の就職に有利なようにと党員証を用意したのを、フォスコは目の前で破りました。ファシズムと父親から逃げたのですが、逃げた先の日本ももうひとつのファシズムの国でした。

札幌では、「もっとも楽しく幸せだった」という生活を送りました。金髪で青い目のダーチャは、どこへ行っても「カワイイ、カワイイ」、「青い目のオニンギョサン」と言われ、いたずらっ子たちにからかわれても逃げるどころか追いかける元気な女の子でした。自分もその子たちと同じ日本人だと思い、キモノを着て、長いあいだ正座することもできました。

宮澤弘幸はフォスコを親友と呼んでいます。「宮澤・レーン事件」については他の方がお話になるでしょうから省きますが、小さかったダーチャと宮澤とのほほえましい接触をうかがわせる彼の短歌があります。宮澤弘幸の妹・秋間美江子さんが 2012 年に北海道大学に寄贈した宮澤弘幸作成の「青春を綴ぢたアルバム」に載っているものです。

「稚きダーチャ」と題するページに、愛らしいダーチャの写真８葉と短歌３首が書かれ、孔子の「朋有り、遠方より来る、また楽しからずや」とイタリア語の添え書きがあります（写真参照）。



なつかしげに我が名を呼べるイタリアの
　　乙女のすがた妹のごと

澄みきりし青き瞳よふるさとの
　　久遠の都の空思はしむ

ムッシイと呼ばるゝ我もふるさとを
　　出て居れば何か異人めきたる

ムッシイとはムッソリーニです。彫りの深い弘幸はそう呼ばれていました。

フォスコがイタリア語教師として京都大学に招かれて、一家は京都に移りました。そこへイタリアが連合軍との休戦協定を結んだのち、ムッソリーニがうち立てたドイツの傀儡政権サロー共和国を日本政府が承認し、この共和国への忠誠を拒否したために、一家は名古屋の強制収容所へ送られました。「敵国人」、「裏切りもの」となった収容者がどんなにひどい待遇を受けたか、とくに育ち盛りの少女がどんなにお腹をすかせたか、空襲や大地震でどんなに怖い

思いをしたか、ずっと書けないでいたことを、作家は昨年10月に『わたしの人生』という本で語っています。11月には邦訳も出ます。

帰国後のイタリアでの生活も困難でしたが、早くから文筆活動をはじめ、20歳で「ヴァカンス」という小説を完成させました。11歳の少女のヴァカンツァ（空っぽな感覚）とタブーである子どもの性がスキャンダルとなって手ひどい評価を浴びましたが、この第一作にこそ彼女が一貫して追求する、牢獄とそれからの解放、女性に加えられる暴力というテーマが凝縮しています。主人公の少女はまだ独りぼっちですが、その後作家がフェミニズムと出会い、果敢な活動をとおして生み出した作品では、解放されるための女性の連帯がテーマとなっています。その代表作が日本でもしばしば上演されている『メアリー・ステュアート』という戯曲で、シラーは二人の女王を対立させましたが、ダーチャは二人が出会い、理解しあい、男たちを笑いとばす舞台をつくりました。

ダーチャさんはご高齢になりましたが、いまなお抑圧されている人たち、社会の枠の外にある人たち、声を上げる術のない人たち、とくに女性と子どもの代弁者となって、世界中を動きまわっておられます。2歳で大型客船で日本に来た小さな旅人は、いまなお長い長い旅をしつづけている旅人です。

この度の来日に心よりお礼を申し上げて、ダーチャさんの紹介とします。

若者たちに伝えて、平和の力に

川嶋　均＝東京藝術大学講師

ダーチャさん、こんにちは。東京藝大でドイツ語の講師をしています、川嶋均と申します。

私は宮澤弘幸さんの事件を、1993年に制作された1本のドキュメンタリー映画を通して知りました。ごく普通の大学生が、戦争遂行のために国家権力が引き起こしたスパイ冤罪事件に巻き込まれていった、歴史のおそろしい事実に衝撃を受けました。当時、まだ生存していた関係者たちの真実味あふれる証言にすっかり胸をつかまれてしまったのです。その中に、当時フィレンツェ大学の一室で収録された、フォスコ・マライーニさんのお話がありましたが、それはとりわけ私の心を揺さぶるものでした。宮澤弘幸さんの4年間近くに及ぶ過酷な獄中生活で、身も心もボロボロにされた弘幸さんが、1946年初頭、フォスコさんの前に現れた時、獄中で受けた拷問や虐待によって変わり果てた姿に、マライーニさんは最初、それが親友・弘幸さんだとは分からなかったそうです。それを語りながら目頭を押さえ、涙を流すマライーニさんの姿には、人間の真実味と真心があふれていました。今でも私は毎年、事件が起きた12月8日が近づくと、大学の教室で、学生たちに彼の物語を語っているのですが、マライーニさんのこのエピソードにさしかかると、つい私も涙に声を詰まらせてしまうのです。

その後、マライーニさんの回想録を読み、マライーニさんが反ファシズムの思想を貫いて名古屋の収容所に入れられ、ダーチャさんたちご家族とともに凄絶な体験をされたことを知り、たいへん心を痛めました。学生たちに語り伝えねばならないことは、まだまだたくさんあったのです。しかしそんなひどい経験をされた後でも、フォスコさんやダーチャさんが日本への愛情を捨てずにいてくださったことが、忌まわしい歴史のなかで、ただひとつの救いであるように私には思われました。

私たちがいま危惧するのは、特にこの10年あまりの間、日本政府が歴史修正主義に傾き、民主主義を軽んじる強権的手法がまかり通るようになっていることです。若い弘幸さんや普通の庶民を悲劇へと引きずりこんだ、当時の戦時立法を彷彿とさせるような法律が、次々と現代日本の議会で成立するのを、私たちは止めることが出来ていません。ヨーロッパから聞こえて来る、極右勢力の拡大を知らせる最近のニュースにも、私たちは気を揉みつつ注視しています。

ところで戦時中の北海道では、いろいろな事件がありまして、私がいま調査しているのは、美術教育や作文教育にとりくんだ教師や学生たちがあいついで逮捕され、獄中生活を強いられた事件です。美術教育で 28 人、作文教育で 60 人近い人々が捕まりました。宮澤弘幸さんが網走の刑務所に入れられ、マライーニさん一家が名古屋の収容所に入れられていた当時、同じように彼らも北海道内各地の独房に入っていたのです。去年 12 月、芸術と教育に対するこの弾圧の歴史を伝え、彼らの作品を展示する小さな展覧会が、この東京で開催されました。1 週間の会期を終え、展示品をまだ片付けていた最中に、私の電話が鳴りました。それは札幌の奥井さんからで、ダーチャさんの来日計画が動き出したことを知らせるものでした。彼女は興奮していましたし、私もほんとうに驚きました。

ダーチャさんと今日こうしてお会いして、ダーチャさんを通じて、天国のフォスコさんや弘幸さんとつながれたこと、その喜びを、私たちは忘れないでしょう。北大のあの外国人官舎で、「心の会」を通じて人々が友情をはぐくんだ、あのサークルの精神を、あなたとともに分かち合えた今日という日を私たちは忘れません。あなたが私たちに語ってくださるひと言ひと言を心に刻み、若者たちにも伝えて、平和への力にしていきたいと思います。ありがとうございました。いつまでもお元気でご活躍ください。

「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」を伝え続ける　福島　清＝毎日新聞活版ＯＢ

「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を調べ、二度と繰り返させないための活動をしている毎日新聞活版ＯＢの福島清です。私たちの活動内容は、プログラム・参考資料の 57 頁をご参照ください。

ダーチャさんをお迎えした機会に、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」への取組みを通じて感じている２つのことを申し上げます。

一つは、戦争は必ず、平和に生きたいと願う人々への弾圧と一体となって強行されるということです。日中戦争のさなか、北大では北大生たちは、「心の会」で、アメリカ、ドイツ、フランス、そしてイタリアの教員たちと、国際色豊かに、心が通い合う交流を重ねていました。しかし戦争激化にともない、この活動は否定されたのです。宮澤弘幸も、マライーニ一家もその犠牲となったのです。戦争とそれにつながる弾圧に対しては、敏感に受け止め、そして力を合わせて反対すべきだと考えます。

二つ目は、国家権力が犯した犯罪は、きちんと謝罪させるべきだということです。第二次世界大戦中、アメリカ在住の日系人は強制収容されました。しかし戦後、1988 年、レーガン大統領は、日系人 6 万人に謝罪し、一人 2 万ﾄﾞﾙを支払いました。また日本では、軍人・軍属に対して 60 兆円もの遺族年金を支払っています。しかし、併合していた朝鮮、台湾の軍人・軍属には支払わないほか、空襲被災者、治安維持法犠牲者など、戦争と国家権力による弾圧被害者は無視しています。マライーニ一家も同じ被害者なのです。戦争と弾圧に対しては、国家権力の責任を徹底的に追及すべきです。

戦争による弾圧を体験されたダーチャさんを迎えて、二つのことを再確認すべきであると考え、一言発言させていただき、歓迎の言葉とさせていただきます。

（５）ダーチャ・マライーニさん「日本訪問記」

「ダーチャ・マライーニさんは、帰国後、2024 年 7 月 3 日付「Corriere della Sera Newsletter（コッリエーレ・デッラ・セーラ　ニュースレター)」に「日本へ“帰国”もう失くなった家」と題して、以下の記事を寄稿しています。この記事の最後に**「自衛の権利は平和を希求する意志と両立しうるか？　どこまで、平和への愛ゆえに、より強い者の脅迫に譲歩できるのか？　そして屈従することは平和をもたらし、戦争をやめさせられるのか？」**とあります。ダーチャさんにとって、おそらく最後となるのではないかと考えられる今回の訪日を通じて提起されたこの問いかけの意味は深く、重いものです。

「日本へ“帰国”もう失くなった家」　　（翻訳・望月紀子）

日本、札幌。ここは気候は穏やかだが、東京はすでに煮えたぎっていた。エアコンはフルに稼働し、私も含め多くの者が風邪を引いていた。山が多く緑に恵まれたこの一帯は観光客も少なく、人里はなれた田舎でよくあるように、外来の者を親切心と好奇心で迎えることを心得ている。観光客であふれる大都会で経験するような、外来の者をお金を巻き上げるカモとしてではなく、耳をかたむけるべき物語や新しい情報をもたらす者として見てくれるのだ。ともあれ日本人は全体として礼儀正しく協力的で、それも形式的な礼儀正しさだけでなく、社会的な関係を円滑にするために育んできた古来からのひとつの選択による礼儀正しさであり、その基盤には共同体のほうが個人よりも大切だという世界観がある。「私たちにもそれを少しください」という言い方になるということだろうか。ここが私たちと逆なのであり、私たちは共同体や国家の価値よりも極端に個人主義を優先するのである！

外国人が衝撃を受けることのひとつは、日本人が木でできたとても美しい住居を簡単に壊すことだ、古い歴史をもつ寺院すらも、つねに新しく建て直される。フランク・ロイド・ライトのリバーティ様式の傑作である帝国ホテルも解体されて、高橋という建築家の指揮のもとに建て直された。すべてを木材で建てる古来からの慣行のなせる作業である。石は建築家たちに知られていなかった、木材、陶器、紙、藁だけだった。ということは家は火事になりやすく、それゆえつねにすばやい再建の用意ができていたのだ。ここから住居や寺院がどこか弱い、長つづきしないものと考える慣習が発生した。だがおそらくそこには、連続的な変転、世事からの離脱という仏教の世界観もあるのだろう。家は住むにはよくできていると思われるが、ひとつの時代の記憶として伝えられるべきものとはなっていない。風通しのいい部屋、藁で編んだタタミを敷きつめたすばらしい床はせいぜい人の一生分もちこたえるぐらいだ。時とともに汚れ、消耗し、灰にされなければならない、死者の肉体がほかの肉体に、ほかの生命に場所をゆずるために灰にされるように。ただ、現代は鉄とセメントでできて、ますます高くなっている高層ビルに新たな場所がある。建築家たちは非常に優秀になり、それらの高層ビルを揺れる構造にした。地震のとき、超高層のボディは踊り、身をよじるけれど、崩れない。はるかな古代のシステムが正確で持続可能な精神で採用されているのだ。でもこれは、日本の詩歌にうたわれているように、霊妙に外にひらかれ、それを抱きしめて愛撫する庭をもっていた家の意味を変えてしまった。いま、超高層ビルは無限の力という感覚を与えるが、木の家に住んでいた人たちが、樹木や水、月などともっていたつながりは完全に消えてしまった。このような精神性の芸術を知っていた詩人たちはいま方向を失っているように私には思われる。月の代わりに目の前にコンクリートの壁があったら、ハイクはどんな意味をもつのだろう？

北海道大学は広大で、樹齢数百年もの樹木や清らかな水の流れる小川や池などのあるすばらしい庭園

のなかにある。この庭園のなかに、私が幼少時に家族と住んでいた家があった。その家は壊されてしまった。そこで私が見出したのは、人生の最初の数年、私とともにあった樹齢数百年の樹木とあの森と水の原初のにおいだけだった。

学生たちと会うために入ったのは、ガラスと鉄の半円の天井のついたとてもモダーンな講堂だった。私はすぐに学生たちが、話を聞いて理解しようとしているのだとわかった。まるでごく最近の過去が彼らの手からこぼれ落ちそうで、それを私の記憶を介してどうにかとどめおこうとしているかのようだった。彼らのだれひとり、日本に反ファシズムの外国人を収容した強制収容所が存在したことを知らない…。そしてそこで生きていた者にとっては、まごうことなき飢え、病気や寄生虫、絶望をもたらす飢えを、警官たちのサディズムを、悪夢の空襲を語るのは容易なことではない。だが学生たちの熱意が、あの飢えとあの監禁状態を語ることがまったく無意味なことではないと私に気づかせてくれた。

終わってから案内された小規模な写真博物館に、1940 年代に文学や民主主義を話そうと集まった学生グループの写真があった。グループは「ソシエテ・デュ・クール（心の会）」と呼ばれていた。フランス語が、その後英語に取って代わられたが、当時は国際語だったのだ。その小さなグループの目的は敵国とみなされるようになった国々との文化的なつながりをとおして戦争に反対することだった。ソシエテのメンバーは主として日本人学生だったが、実際に、アメリカ人二人、フランス人一人、ドイツ人一人、私の両親であるイタリア人二人も参加していた。そのなかに宮澤弘幸という学生がいた、もっとも活動的な一人だった。41 年 12 月 8 日の日米開戦とともに、不運な青年は、外国人と交際していた、政府の政策を批判したというだけでスパイの容疑をかけられた。投獄され、あまりに過酷な扱いを受け、戦後、釈放された直後に死んだ。

戦後になって彼の無罪が証明されたが、若者は勇気ある反軍国主義の記憶だけ残して死んでいる。こんにち、自覚と明晰さを愛する日本は、犯した過ちが公に認められ、その被害を受けた人たちが可視化されることを求めている。どこでも、国は政体が変わったとたんに疑い深くなり、戦うべき敵を探すものだという事実を噛みしめなければならない。敵がいなければ、つくりだす。このことは最近の新聞記事があまりにも鮮明に語っている。独裁者が支配しているところではどこでも疑惑が生じ、疑惑をかけられた者は簡単に犠牲者となる。彼らが犯した唯一の過ちが体制を批判したこと、あるいは黙っているべきだった、不都合な真実を話したということだ。最近、偏狭な国々で投獄されているすべてのジャーナリストたちに目をむけてもらいたい。

理不尽なこと、門を閉ざすことに屈服するという誘惑はお米とサケのこの国でもひろがりつつある。だが私は、犯罪者を入国させるとか、仕事を奪われるという恐れ以上に、新たな不寛容は自分たちの古来からのアイデンティティの何かが失われるという恐怖であろうと思う。この感情が単純な人たちにたやすく衝撃を与えるのである。さらにプロパガンダがそこにはたらきかけて集団的恐怖の重圧を増す。宮澤の名誉回復を求める会は戦時下に体制が犯した過ちを記憶に刻もうと提言しているが、それはまた戦後採択され、こんにちふたたび議論されている決意、すなわちもはや軍隊はいらない、あらゆる核開発の拒否、平和堅持の意志を再確認するためでもある。

こんにち、自分のものでない領土や都市を侵害して領土を拡大しようと決断した独裁体制を目前にして、このようなすべての問題が見直されている。しかも独裁体制はそれが引き起こす災害を考慮もせずに、学校や保育園、病院、工場、発電所などを情け容赦なく冷酷に空爆して、それを実行しているのだ。

ここで重大な疑問が生じる。自衛の権利は平和を希求する意志と両立しうるか？　どこまで、平和への愛ゆえに、より強い者の脅迫に譲歩できるのか？そして屈従することは平和をもたらし、戦争をやめさせられるのか？

ダーチャ・マライーニ

19. Ritorno in Giappone: la casa che non c'è più

di **DACIA MARAINI**
da Sapporo

Il clima è mite, mentre a Tokyo già si bolle. Anche se l'aria condizionata va a tutto volume e molti come me si prendono il raffreddore. Questa zona montagnosa e verdissima del Paese è poco visitata dai turisti e, come succede nelle province isolate, sa accogliere con gentilezza e curiosità lo straniero. Non lo vedono come un pollo da spennare, tipico delle grandi città turistiche, ma come qualcuno che può portare racconti e notizie nuove da ascoltare. In generale comunque i giapponesi sono cortesi e disponibili, e non si tratta solo di una cortesia formale, ma di una scelta antica coltivata per facilitare i rapporti sociali e si basa su una visione del mondo in cui la comunità conta più dell'individuo. Verrebbe voglia di dire: datecene un poco anche a noi, che qui siamo al contrario esasperati dall'individualismo che prevale sul senso della comunità e dello Stato! Una cosa che colpisce gli stranieri è la facilità con cui **i giapponesi distruggono le loro vecchie bellissime abitazioni di legno**, perfino i templi più antichi vengono ricostruiti sempre nuovi. Anche l'Imperial hotel, un capolavoro liberty dell'architetto Frank Lloyd Wright, è stato buttato giù a Tokyo per costruirne uno nuovo sotto la guida dell'architetto Takahashi.

Dacia Maraini bambina: compleanno in Giappone

- **La pratica viene dalla antica abitudine** di edificare tutto in legno. La pietra non era conosciuta dagli architetti, solo legno, ceramica carta e paglia. Il che significava che facilmente le abitazioni prendevano fuoco e quindi erano sempre pronti a ricostruirle rapidamente. Da qui l'abitudine a considerare le case e i templi come qualcosa di fragile e poco duraturo. Ma forse c'è dentro anche **una visione del mondo basata sul ricambio continuo, un distacco buddistico dalle cose del mondo**: le case per abitare ben vengano ma non sono da tramandare come memorie di un'epoca. Le camere ariose, i meravigliosi pavimenti di paglia intrecciata, devono durare quanto una vita. Col tempo si sporcano, si consumano e devono essere inceneriti come si inceneriscono i corpi morti per fare spazio ad altri corpi, altra vita. Solo che oggi il nuovo consiste in grattacieli sempre piu alti, fatti di ferro e cemento. E gli architetti sono diventati bravissimi nel renderli ondivaghi. In caso di terremoto i corpi altissimi ballano, si torcono, ma non crollano. Il sistema antisismico è applicato con spirito preciso e duraturo. Ma questo ha cambiato il senso di una casa delicatamente esposta e di un giardino che la abbraccia e la accarezza, come racconta la poesia giapponese. Oggi i grattacieli regalano un senso di onnipotenza ma i rapporti che gli abitanti delle case di legno avevano con gli alberi, l'acqua, la luna sono spariti del tutto. I poeti che conoscevano questa arte spirituale oggi mi sembrano disorientati. **Che senso ha l'haiku se al posto della luna hai davanti una parete di cemento?**

- **L'università di Hokkaido è immensa** e si trova dentro un parco magnifico carico di alberi centenari, di torrentelli d'acqua limpida e piccoli laghi. Dentro questo parco c'era **la casa dove ho abitato da bambina con i miei**. La casa è stata demolita. Ho ritrovato solo gli alberi centenari e quell'odore di bosco e di acque selvagge che mi hanno accompagnato per i primi anni di vita. Per incontrare gli studenti mi sono trovata in una sala modernissima dal soffitto a volta di vetro e ferro. Ho capito subito che i ragazzi avevano voglia di ascoltare e di sapere. Come se il più recente passato sfuggisse loro di mano e volessero in qualche modo fermarlo attraverso i miei ricordi. **Nessuno di loro sa che ci sono stati dei campi di concentramento per stranieri antifascisti in Giappone**. E per chi li ha vissuti non è facile raccontare la fame vera, quella che porta malattie, parassiti, disperazione; il sadismo delle guardie, l'ossessione delle bombe. Ma l'attenzione degli studenti mi ha fatto capire che non era del tutto inutile narrare di quella fame e di quella prigionia.

- **Mi hanno portato poi a visitare un piccolo museo fotografico** in cui appaiono le immagini di un gruppo di studenti degli anni Quaranta che si riunivano per parlare di letteratura e di democrazia. Il gruppo si chiamava Société du coeur. Il francese allora era la lingua internazionale oggi sostituita dall'inglese. Lo scopo del piccolo gruppo era opporsi alla guerra attraverso nuovi legami culturali con Paesi che venivano considerati

nemici. Alla Société, costituita prevalentemente da studenti giapponesi, partecipavano infatti due inglesi, una francese e due italiani, mio padre e mia madre. Fra tutti lo studente Hiroyuki Miyazawa era uno dei piu attivi. Quando nel '43 il Giappone, rinunciando alla sua indipendenza, si è alleato con la Germania nazista e con l'Italia fascista, il povero ragazzo è stato accusato di spionaggio, solo perché frequentava forestieri e aveva criticato le politiche del governo. Messo in prigione è stato trattato con tanta crudeltà che appena uscito, è morto di stenti. Nel dopoguerra è stata riconosciuta la sua innocenza ma intanto il giovane è morto lasciando solo un ricordo di coraggioso antimilitarismo. **E oggi quel Giappone che ama la consapevolezza e la chiarezza**, chiede che si riconoscano gli errori fatti e si dia visibilità a chi li ha subiti. Viene da riflettere sul fatto che ovunque, appena un governo si trasforma in regime, diventa sospettoso e cerca nemici da combattere. Se non li trova, li inventa.

- **Questo ce lo racconta** anche troppo chiaramente la cronaca politica di questi giorni. Dovunque regni la tirannia, nascono i sospetti e i sospettati facilmente si trasformano in vittime. Unico torto è avere criticato il regime o avere detto una verità scomoda che si doveva tacere. Vedi tutti i giornalisti che in questi giorni sono chiusi nelle carceri dei Paesi illiberali. La tentazione di cedere all'irrazionalità e alla chiusura delle porte sta prendendo piede anche qui nel Paese del riso e del sakè. Ma credo che più che la paura di imbarcare criminali, o di perdere posti di lavoro, le nuove intolleranze nascano dalla paura di smarrire qualcosa della propria antica identità: un sentimento che facilmente fa breccia negli animi dei semplici. La propaganda poi ci mette il suo carico per appesantire le paure collettive. L'associazione che si richiama a Miyazawa si propone di portare alla memoria gli errori fatti dal regime di quegli anni, anche per ribadire le decisioni prese dopo la guerra e oggi rimesse in discussione: non più eserciti, rifiuto di ogni iniziativa nucleare, volontà di mantenere la pace.

- **Oggi tutti questi propositi vengono rivisti** di fronte a un regime tirannico che decide di allargare il suo territorio invadendo e impossessandosi di terre e città non sue. E lo fa con crudeltà e determinazione, incurante dei disastri che provoca, bombardando scuole, asili, ospedali, fabbriche e centrali elettriche. Qui nasce la grande questione: il diritto di difendersi può coesistere con una volontà di pace? **Fino a che punto cedere ai ricatti del più forte per amore di pace?** E la sottomissione porta pace e riesce a fermare la guerra?

【注】このイタリア語記事では、宮澤弘幸は「日独伊三国同盟が締結された 1943 年に検挙された」となっていますが、実際には 1941 年でしたので、翻訳文では 1941 年としてあります。翻訳者の望月紀子さんがダーチャさんに連絡し、訂正をお願いしました。また、スパイ容疑の記述で「政策を批判」とありますが、宮澤弘幸には政策批判の言動はなく、むしろ軍国少年でしたが、そんな宮澤弘幸に罪を着せたのです。

北海道帝国大学平面図

1939（昭和 14）年当時

（北海道大学大学文書館提供）

当時、「外国人教師官舎」に住んでいた教員は以下の通り。

右から「予科ドイツ語教師＝ウィリー・クレンプ Willy Kremp」「予科ドイツ語教師＝ヘルマン・ヘッカー Hermann Hecker」「予科英語教師＝ハロルド・レーン Harold Lane、ポーリン・レーン Paulin Lane」「医学部研究生＝フォスコ・マライーニ Fosco Maraini」

外国人教師の官舎 ４棟

（６）ダーチャ・マライーニさんを迎えて…… 感想と総括

「ダーチャ・マライーニさん歓迎・交流会」に参加された方が、フェイスブックやメールで感想を書かれています。承諾をいただいて掲載・ご紹介します。また、歓迎・交流会の開催に関わった皆さんからの感想も合わせて紹介し、最後に実行委員代表・泉定明さんの総括を掲載します。

戦時中の日本で迫害された、イタリアの闘う作家ダーチャさん

伊藤千尋・朝日新聞ＯＢ、ジャーナリスト

https://www.facebook.com/chihiro.ito.1069/posts/pfbid0tCURwDfvDRarLHy6yf5Wu4g8o2QgHPBQA91qbwxtypeypFi1zQLvzTKHfX95GXbZl

2024 年 6 月 12 日　フェイスブック

「宮澤レーン事件」をご存知でしょうか？戦時中、北海道帝国大学（現在の北大）で英語を教えていたレーン教授夫妻と、学生の宮澤弘幸が特高からスパイの嫌疑で検挙された冤罪事件です。彼らと交友があったイタリア人アイヌ研究家マライーニの娘ダーチャさんもイタリアが連合軍に降伏した後、敵性外国人として名古屋の強制収容所に入れられ、飢えと屈辱の少女時代を過ごします。戦後は反ファシズム、フェミニズムの旗手として作家活動し、ノーベル文学賞の候補に名が挙げられます。そのダーチャさんが来日し今日、12 日、都内で歓迎の交流会が開かれました。

ダーチャさんは一言一言、73 人の参加者の心に刻みつけるようにゆっくり語ります。強制収容所では粕谷という警官から残酷、非人道的な扱いを受け、「皆さんが想像できないほどの飢え」と寒さで衰弱したこと。それにもかかわらず、周囲の農民たち普通の人々が親切だったため、日本の当時の体制を憎んでも日本の市民とは良い関係を続けていると語ります。「人間だれしも善と悪を心に抱えていますが、読書や教育などを通じて得た文化こそが悪をコントロールでき、破壊を建設に替えることができるのです」と述べます。

ガザの虐殺に触れました。今、世界が危機に陥っている。民主主義と強権主義の二つの立場が激しく衝突している。根本に文化の衝突がある。時代の変化に対して、変化をただ止めるのか、検証しつつ受け入れるのか、の二つの方向がある。思考を閉ざして過去に

撮影・伊藤千尋

すがるのでなく、力を合わせて変化に取り組むことが大切だ。女性の社会進出にも寛容性が必要だ、とも。

収容所での酷い生活は２年間にわたって続きました。外の世界と完全に遮断され、何が起きているのか一切わからず、「貴様らの喉をかき切ってやる」と警官から脅しを受ける恐怖の日々。その中で唯一素晴らしかったのは、収容所の中庭の桜の樹の下で、父と母が算数や哲学などを教えてくれたことだった。世界への観点、相手の立場に立ってみることの大切さを習ったと言います。

「宮澤レーン事件のようなことは世界中で起きています。他者に対するリスペクト（尊敬の念）がサスペクト（疑念）に変わる時。戦争の一歩手前に、このようなことが起きがちです」。最後をこう締めくくりました。

質問に立った東大の女子学生が「今の私たちへの助言」を求めると、ダーチャさんは「できるだけ多くのニュースソースを持つこと」と語りました。フェイクニュースに満ち、メディアもあえてフィルターを通したニュースを流す時代に、真実を見極める力が

必要だと言うことです。

僕が「宮澤レーン事件」を知ったのは３年前でした。札幌で憲法の講演をするのを機にアイヌ文化を取材しようとして訪れた北海道大学の構内で、この事件から 80 周年の展示を見たのです。終戦からこんなに日が経つのに、広く知られていないことがまだまだあるのだと驚きました。

その多くが人権問題です。戦争に関することはさまざま問われてきましたが、人権問題はなかなか日の目を浴びてこなかった。世界の中で日本に欠けている価値観が人権であることを思えば、生き証人の話を聴くことができる今のうちにこれらの問題を追及することが、私たちの社会を少しでも良くする道だと思うのです。

ダーチャさんの講演を聞いた藝大生が熱い感想

川嶋　均・東京藝術大学

https://www.facebook.com/hitoshi.kawashima.794/posts/pfbid0i59CeWM5HMYg9qUeibhSjTVWuRtBj2yjQpyWiDKFh7sNxtcSSHqPYve9X9CLzzzpl

2024 年 6 月 12 日　フェイスブック

イタリアの作家、ダーチャ・マライーニさんの来日最初となる新宿・常圓寺でのプログラム。戦時中起きたスパイ冤罪事件被害者の北大生・宮澤弘幸さんの墓前に手を合わせ、「迎える会」主催の歓迎・交流集会へ。最後に予定していたぼくのスピーチは、時間が押して割愛となり、来てくれた学生には申し訳ないことだった。通訳の関係であらかじめ提出してあった幻のスピーチ原稿。今日の記念にここに載せておく。（「幻のスピーチ原稿」は「（４）歓迎の言葉」の19㌻に掲載していますので、ここでは省略します）

＊

歓迎・交流集会でぼくの隣に座り、熱心にノートを取りながらダーチャさんの話を聞いていた藝大生・奥村智喜くんから熱い感想が届きました。通訳の黒澤多佳子さんから「感想あればダーチャさんに伝えますよ」と言われたのを受け、打てば響くように、すぐに送ってくれたのです。学生寮に帰ってからも、夕べはダーチャさんの話ばかりしていたと、今日学内で会った別の学生から聞きました。せっかくなので、本人の同意を得て、ここに紹介させてもらいます。

＊

ダーチャさんのお話はとても衝撃的で心に深く残ります。厳しい環境での毎日は、今の僕からは想像できず、今の普段の生活とは全く違います。十分な食べ物がないこと、そして暴力や恐怖が日常的であることを聞くと、自由で安全な生活がどれだけ貴重かを強く感じます。

また、そんな厳しい状況でも、希望を失わず、助け合いながら生き抜こうとする話には感動しました。小さな喜びを見つけたり、仲間と支え合ったりすることが、どれほど大切かが分かりました。

このようなお話を聞くことで、歴史の教訓を学び、同じ過ちを繰り返さないための大切さを感じます。日本での生活の話は、私たちに人間の強さや希望の重要性を教えてくれました。

また、人には誰にでも善と悪があり、その悪のネガティブな面を抑制することができるのが文化であり、教育であり、読書などであるという言葉は特に心に残りました。僕は音楽を、特に声楽歌曲とオペラを専門に勉強していますが、逆にいうと僕には取り柄がそれしかありません。この悲惨で二度とあってはならない歴史を僕なりに、音楽（特に声楽歌曲とオペラ）という文化を通じて後世に伝えることをしたいと強く思いました。

日本には谷川俊太郎という詩人がおりますが、彼は「死んだ男の残したものは」という戦争をテーマにした詩を書き、その詩に武満徹が音をつけた有節歌曲があります。

ぜひダーチャさん直々に書かれたお言葉に曲をつけ、私なりに後世に伝えていかれないかと思うのです……。ご検討よろしくお願いします。

ダーチャ招聘、そして帯同されている方々へ　　土肥秀行・東京大学准教授

2024年6月14日　関係者へのメール

新宿の会ではたいへんお世話になりました。熱のこもった見事な会であったと思います。心より感謝申し上げ、敬意を表します。

会のあとすぐに簡単な報告をＰＯＷ研究会のメンバーの方々に対しまとめました。下に引用いたします。また11人いた学生のうち、東京大学2年の文系の女子学生が感想を寄せてくれました。彼女の記した感謝の言葉は、学生を代表し、皆さんにむけられております。（ここではプライバシーの都合上転載していません）

個人的には、僕がイタリア文学を志すきっかけとなった、ダーチャの訳本を出されていた望月紀子さんにお目にかかれたことがたいへん大きな収穫となりました。学恩への感謝の想いをご本人に伝えさせていただきました。

ダーチャの旅はまだまだ続き、皆さんのお仕事は進行中です。計画がうまくいくよう祈りつつ、改めて感謝の言葉を申し上げます。

（土肥の報告）

ＰＯＷ研究会の皆さま、

6/12（水）、新宿・常圓寺ダーチャ・マライーニを囲む会の報告です。

87歳の現役作家ダーチャ・マライーニ（この春にも最新作の短篇集を発表）が6/11来日し翌日、上記の会に臨まれました。これまで何回か直に話を聞く機会はありましたが、頭の冴えは相変わらずで、活き活きとした話し振りで安心しました。

常圓寺では逐次通訳付きで計1時間話されました。彼女にとって最後の日本でしょうから、感慨ひとしおであったことでしょう。冒頭から率直に日本への思いを語っていました。官憲は小さな権力をふるってサディストだったが、収容所外の日本の民衆は自分たちと同じくつつましく心情的には味方である、と当時も感じており、ゆえに日本への信頼は失わなかったと強く訴えられていました。

（イタリアもファシストと反ファシストで割れていましたから、日本人あるいはイタリア人とひとくくりにできないことは彼女にとって自明なのでしょう。フォスコの妻トパツィアと幼い娘3名がずっと収容所にいたのは、東京のイタリア・ファシスト共和国代表部が目の敵にして、中立国の一切の介入を拒んでいた、というのも理由の一端です。イタリア人同士の分裂は激しかった、そして今はもっと強くなっています。現在、左派がどんどん弱くなっているのも問題です。）

アイデンティティの多面性、文化の多様性、民主国家の分権は、文化人類学者の父フォスコ譲りの主張なのでしょう。付け加えれば、ダーチャは文学者ですが、よく「旅をしながら作家として成長した」と言っていますから、常に現場や、目の前の生身の人間を相手にすることを大切に考えています。ですから話も上手なのです。

引率した11人の学生のうち、法学系の藤森香帆さんが皆の前で発言いたしました。若者の言葉にも真摯に対応する姿勢（「若い人は複数の情報源をもって真実を見極めないといけない」）に学生たちは感銘を受けていました。

ダーチャの話の内訳は、自らの収容所についてが8割、宮澤については2割といったところでした。

ＰＯＷ研・小宮さんの歓迎の言葉も心がこもっていました。直前までストップタイマーで練習されつつ、本番では臨機応変に要点のみ伝えるという、見事な対応ぶりでした。

ダーチャの話には、現在のネオファシスト政権への危惧、権力の集中や移民嫌悪を牽制する発言もありましたが、1970年代初頭のフェミニズム運動の牽引役でしたから、一貫した姿勢が見られます。直接的な言葉よりも、困難な時代を、文学や文化の力で乗り越えようとするダーチャ、そしてイタリアの力を、彼女の言葉から感じてほしいです。彼女は活動家ではなく作家であることを人々は忘れがちです（よって彼女の姿勢は語られど、文学作品が語られることは少ない）。

夕刻の東京イタリア文化会館（九段下）でのダーチャもお元気で、30分のスピーチ（午後の話の縮約版）、

懇親会とフル活動でした。ダーチャの話で、会における主役のフォスコ・マライーニ賞受賞者がかすんでしまいそうでしたが、ある程度はやむを得なかったでしょう。

ダーチャの旅は、名古屋（収容所跡）、札幌と続きます。83 年ぶりの北大で彼女は何を思うでしょうか。今回の（最後の）旅は、自分のためというより宮澤レーン事件のため、という他己主義に深く心を打たれます。他己性は、イタリア人ならではでしょう（一般のイメージではエゴイストかもしれませんが、よいカトリック精神が生きています、彼女もカトリックの寄宿学校で教育を受けました）。

ローマから東京までダーチャに付き添ってきた若者も言っていましたが、ダーチャは本当にタフで、何でも自分でやってしまうとのことでした。招聘に動いた皆さんも熱のこもった仕事ぶりで、こうした人生の先輩の方々をよく見ておくよう（そして負けぬよう）、学生たちに言い聞かせておりました。

土肥さんＦＢから

ダーチャさんと講演を聞いた東大生

ダーチャ・マライーニさんと過ごして　　黒澤多佳子・イタリア語通訳

https://www.facebook.com/takako.kurosawa.39/posts/pfbid0Fg8F7JiaUFWVXfmiyXu77svGgTS8MSCwiEU1z76gKzVvaqFr1PZgnN8CkSK6gGezl

2024 年 6 月 20 日　フェイスブック

イタリアの作家ダーチャ・マライーニさんの来日のお手伝い・翻訳と通訳同行（札幌除く）をさせてもらいました。素晴らしい記録や感想はメディアの記事や他の方々の投稿を見ていただくとして、まずは私個人の体験談として書き留めておきます。

この 2 か月、必死に彼女の本を読み、スピーチを聴き、錆びついたイタリア語と日本語のオーバーホール。日常的に翻訳はしていても、時短と称して自動翻訳を下訳にしてきたツケが。ゼロから自分の頭で脳内変換するのに慣れてない！さらに恐ろしいことに、日本語ですら、メールや SNS ばかりの生活で、書けてもキチンと話せない！語彙が口をついて出てこない！と愕然としたのが残りひと月。背水の陣で日々特訓、夕べに「はぁ、何とかなるよね」、朝に「無理無理無理、完全自信喪失」の毎日。私、大丈夫か。あまりの大役に、元同僚の助っ人も頼み、泣いても笑っても当日がやってきた。

ダーチャの信念や人柄は数々の動画から窺えたが、想像以上に素敵な、そして謙虚というか素のままの人だった。

羽田でお迎えした時から、垣根ゼロ、何も構える必要のない、心の窓が開け放たれた人だった。

彼女の素晴らしさはここには書き尽くせない。そんな人の言葉、メッセージ、信念信条を、為人を伝えられるよう、彼女に成り代わる気で力を出し切った。

東京、名古屋、豊田、札幌の旅を終えて、今日、ダーチャは日本を発った。同じく力を出し切った彼女は、とうとう風邪を引いてしまった（のちに、コロナ変異株だったことが判明）。喉の薬に、枇杷の種酒のチンキを渡したら喜んでくれた。

「旅の中で生まれ、旅する人生を歩んだ」という彼女はまた、「帰るところがあるからこそ旅立つのだ」

とも書いている。彼女は後ろを振り返って懐かしむタイプではなく、頭の中、心はすでに次の活動にすっかり向いているのが感じられる。

いってらっしゃい、ダーチャ。さよなら、の代わりにそう言いたくなった。お別れではなく、送り出す、そんな言葉がしっくりきた。

イタリア語をやっていて本当に良かった。私の人生の宝となった出会いをもたらしてくれた川嶋均さんには感謝しかありません。機会を与えて下さった、募金を集めてダーチャを招聘した「宮澤レーン事件を考える会」の奥井登代さんにも深謝します。

ダーチャを招く会・東京の泉さん、寺沢さん、福島さんはもはや同志。影に日向に働いた皆さんも併せ、お疲れ様でした。また、滞在中は終始、ダーチャ著作翻訳家の望月紀子さんの温かい存在に支えられました。ありがとうございました。

左から 一條（宮澤レーン事件を考える会）、黒澤、ダーチャ、寺沢、望月 （敬称略）

ダーチャ・マライーニの訪日に同行して

寺沢玲子・登山愛好家

ダーチャ・マライーニさんについては、既に「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」の真相を広める活動を通じて、強い関心を持ち、著書も読んだ。マライーニ一家が抑留された名古屋の天白寮、豊田の廣済寺にあるマライーニの在日墓も数度訪ねている。札幌の山岳関係者にも知人がいる。そんなこんなで、今回の訪日を聞き、ボランティアの手を挙げた。行程の可能な限りに同行し、サポートすると同時に、思想と人柄を学ぼうと考えた。以下、その記録と感想になる（敬称略）。

◆6 月 11 日（火）

＊10:40 着予定を出迎えるため、早めの 9 時過ぎに羽田空港第 3 ターミナルに着く。予定機は 30 分早く着いたから、早く来てよかった。出迎え、望月紀子、黒澤多佳子、札幌から唐渡興宜も向かっていると連絡入る。ダーチャは「機内で眠れなかった」というので、待ち構えていたマスコミ取材を束の間で切り抜け、待機の予約タクシーで、宿舎のイタリア文化会館へ急行。

＊イタリア大使夫妻主催の歓迎夕食会。望月、シルヴァーナ・デマイオ館長（女性）同席。

◆6 月 12 日（水）

＊11：00 イタリア文化会館をタクシーで出発。望月同行。黒澤は、乗った電車が止まったままというので、動いたら常圓寺へ直行をと連絡。ダーチャがコーヒーを飲みたいといい、タクシー運転手お薦めの店に入ったら黒澤が居た。途中、手術したダーチャの足用にガーゼと保湿ローションを買う。

＊12：00 新宿・常圓寺着。宮澤弘幸と家族が眠る供養塔にお参り。（会場で簡単な昼食）

＊13：00～14：30 常圓寺ホールで「ダーチャ・マライーニさん歓迎交流会」78 人参加

＊14：30～15：00 記者会見

＊15：00 予約タクシーで常圓寺発、イタリア文化会館へ。望月、黒澤、唐渡も同行。

＊18：30～19：45　フォスコ・マライーニ賞授賞式
望月、寺沢、唐渡、黒澤同席。

◆6 月 13 日（木）

＊12:00 予約ハイヤーでイタリア文化会館発。東京駅では八重洲口へ着け、札幌から来た一條英俊と合流。札幌からは「なぜ文化会館で合流しなかったんだ」とお叱りの連絡。何のことやら分からない。

＊13：30 新幹線のぞみ 37 号東京発に乗り、15:09 名古屋着。望月、寺沢同行。ダーチャは疲れ気味でホテルまで歩くのも辛そう。「名古屋のホテルはラグジュアリー」と聞かされていたダーチャは話と違うその

ギャップに驚いたよう。
＊夜、仕事を終えてから名古屋へ黒澤が来てくれる（宿は別）。
＊宿泊：ザ サイプレス メルキュールホテル名古屋

◆6 月 14 日（金）
＊「天白寮」に続き、昼過ぎ、戦時中マライーニ一家が抑留されていた廣済寺を訪問。同行は望月、寺沢、黒澤、一條。
＊住職の酒井泰俊氏と加納啓子氏（当時の住職妹でダーチャたちが廣済寺に収容されていた時の友人）が出迎え、歓迎してくれる。終わって境内墓苑にあるフォスコ・マライーニの在日墓にお参り。
＊17：00 ころ NHK の取材が終了。ホテルへ戻る。

◆6 月 15 日（土）
＊13:10 名古屋・セントレア空港から北海道・千歳空港へ。同行は望月。一條は朝の便で千歳へ、寺沢は昼の別便で千歳へ。
＊14:50 千歳空港着。奥井登代ら出迎え。ダーチャ、望月は札幌グランドホテル泊

◇

寺沢の「ダーチャを迎える会」としての担当は、名古屋からの送り出しまでで、札幌での日程後、札幌からの羽田着を迎え、イタリアへの送り出しまでを、改めて担当することになる。つまり札幌での日程は担当外となるが、個人的に全て見届けておきたく、個人行動として、別途、札幌往復することにした。

◇

◆6 月 16 日（日）～19 日は、札幌の報告参照の事

＊18 日夕の千歳→羽田便で帰宅し、19 日 15:35 羽田空港着を第 1 ターミナルで出迎え。同行、望月。この日は昼抜きだったとのこと。予約タクシーで品川のプリンスホテルNタワー着。車の横付けができず、ルームサービスも不可とのこと、ビジネスホテル並み。ダーチャも「こんなの初めて」と珍しく愚痴をもらした。毎日新聞と NHK のインタビューを受け、夕食（NHK と一緒）。同ホテル泊。

◆6 月 20 日（木）
＊半休を取って黒澤が見送りに来てくれたが、ごたごたのために一日休暇を取ってエスコートしてくれることに。朝から大変……。ダーチャは疲れが溜まったのか、中々フロントに降りてこない。そのうち、搭乗予約の便 AZ793(12:40 発)が大幅に遅れると判明。時間があるので、ダーチャの希望でお寺参りへ。まず近くの泉岳寺「赤穂浪士記念館」。黒澤の通訳で「サムライ」「ハラキリ」などについて興味深げにビデオを観た。

次に浅草寺へ。仲見世で日本的なポーチを一つ購入し、ダーチャと黒澤は人力車に乗る。父のフォスコは「ヒトがヒトを酷使している」と批判していたが、近頃はトレーニングと資金集めのために車夫をしている若者が多いとのこと。偶然にも乗った車夫の若者は、今年亡くなった友人の車夫で南極探検家だった阿部雅龍に人力車についての助言をもらっていた若者だった。

二人を待つ間、寺沢と望月は近くのコンビニでコーヒーを飲みながら涼んでいたら、下車した二人も合流。イートインスペースで黒澤お手製のおにぎりを食べてダーチャはご機嫌！

あとは一路羽田へ。空港には東京日程の代表である泉とダーチャと仲の良い望月夫が来ていて、ダーチャは嬉しそう。AZ793 は、大幅に遅れて、16：20 に出発した。

◇

最後に、老婆心から一言。結果として、受け入れ態勢万全とはいえず、冷や汗の綱渡りが何度かあったと言わざるを得ない。予定と実際の食い違い、予約あるいは解約の行き違い、分担があるようでないような、連絡疎通の不十分と、数え上げれば極めて多々になる。にわか仕立てということもあったが、今後の為にも言えば、やはり最初にしっかり話し合って、責任体制をしっかり定め、臨機応変がスムーズにいくよう工夫しておく必要があったと反省される。

救いは、なんとかダーチャに過分の負担をかけることなく（いや、結構な負担はあったが……特に札幌では「休みたい」というダーチャの気持ちにもう少し寄り添って欲しかった）打ち上げ、時に、嬉しい笑顔を何度も向けてもらえたこと。溜まったストレスもいっぺんに飛んでいった。本当にありがとう、お疲れさまでした。

時代に生きる「民主主義者」ダーチャ　　村瀬喜之・北海道大学ＯＢ

あの戦争から79年の歳月が流れ記憶が薄らいできた。いま何をなすべきなのだろう。そんな思いでいた私に、ダーチャさんは「活」をいれてくれた。

当初、ダーチャをイタリアから呼ぶという計画を聞いたとき、正直言って、及び腰だった。毎年の「宮澤・レーン事件のつどい」に参加してくれた北大OBOGたちのうちでもダーチャのことを知っている者はほとんどいない。ぼく自身、先日、名古屋テレビの番組でダーチャのことを知ったばかりだったからだ。なので、常圓寺で歓迎のつどいも、せいぜい10人前後しか集まらないのではないかと思っていた。

だが、近づくにつれて参加者がふくらんでいき、当日は会場がほぼ満席になった。なぜだろう、と思いつつ、ダーチャの話を聞いた。ロシア・ウクライナ戦争、ガザの虐殺という、もう過去になったと思った「戦争」が現実に進行している。ダーチャは、「それに抗う手段の一つが過去の記憶」と自分の少女時代の強制収容所の体験、宮澤・レーン事件、父マライーニのことを語り継ぐ意味を語った。「戦争が近づくと、世の中の空気がリスペクトからサスペクト（猜疑心）に変わる」という言葉、東大女子学生からの「私たちの世代へのアドバイスを」の問いに、すぐに「情報源を多く持つこと、いろんな情報をえて判断するように」と返したのが印象に残った。

時代を生きる「民主主義者」ダーチャと、もっと話したかった。

ダーチャ・マライーニさん来日報告集に寄せて　西里扶甬子（ジャーナリスト）

私は1969年に北海道大学を卒業して半世紀も経って、初めて「宮澤・レーン事件」を知りました。30年以上もご近所に住みながらお会いすることのなかった北大の大先輩である伊藤陽一・セツご夫妻の知己を得て、お誘いを受け、2023年2月、初めて「宮澤・レーン事件を忘れない！北大・戦後世代をつなぐＯＢＯＧ会」主催の集いに参加させていただきました。

ダーチャさんの来日についても、今年2月の集いで初めて知った次第です。その時すでに、ダーチャさんの来日の時期に、ヨーロッパ旅行が決まっていたので、直接お会いできないということは分かっていましたが、ダーチャさんは、私が深く関わっているPOW研究会の研究対象のひとつである、民間人抑留所の過酷な待遇を幼くして体験された方であることに衝撃を受けました。

私も東京のダーチャさん歓迎実行委員ということになっていて、当日現場にいられないことを知りながら、準備やメディア対応、フォスコ・マライーニやダーチャ・マライーニについて学ぶ内に、私が深く関わっているPOW研究会の2人の仲間を、準備に当たられている皆さんの輪の中に参加させたいと強く思いました。この判断は我ながら快挙であったと自画自賛しています。2人というのは、民間人抑留研究の第1人者である小宮まゆみさんと、現代イタリア文学の研究者で、東大イタリア語科で教鞭をとっておられる土肥秀行准教授です。

これによって、ファシズム下の典型的な自由弾圧事件である「宮澤・レーン事件」を現代に伝える活動と、敵国人は民間人であろうとも抑留するという戦時下の国家が行う恐ろしくて、愚かな政策を現代に伝える活動が出会ったことになります。

土肥さんが新宿・常圓寺での歓迎交流会に年若い学生たちを同行して下さったことは、大きな意味をもっています。また、土肥さんがイタリア文学を専攻することになる直接的な動機は、ダーチャさんの作品を読んだことからだったというのも、何か深い因縁を感じます。そして、歴史の闇に葬られてきた民間人抑留所の実態を、誰よりもよく調査されている小宮さんが、日本人を代表して数少ない被抑留の体験者であるダーチャさんに対して、「謝罪」の言葉を述べられたことにも歴史的意味があったと思います。

私はダーチャさんの帰国と入れ違うように帰国しましたが、その後、新聞各紙、婦人雑誌も含む多数の活字メディアがダーチャさんや、父フォスコ・マライーニの生き方、言葉、日本人との交流を連続して伝え続ける状況を感動して見ていました。

日本人がマスメディアと共に戦争について振り返

る 8 月にも、（あるいはだからというべきなのかも知れませんが）それは続き、9 月に入って、東京新聞の佐藤直子さんの深い、優れた記事で完結したように思います。事件・事故のようなメディア受けのする派手な事象でもないのに、来日して 2 か月半以上経ってもこのような現象が見られるということは、ダーチャさんがいかに鮮烈なインパクトを残して行ったのかが分かります。それはとりわけ、彼女の来日について取材した戦後生まれの記者たちとって強いインパクトとなったように思います。

時間が経てば経つほど、ダーチャさんの言葉で伝えられた日本軍国主義下での体験、日本の近・現代史の傷跡について書き手の考察が進み、より深みのある記事になっていきました。また、幼いダーチャがどのような日本人と心を通わせ、なぜ日本を、日本人を嫌いにならなかったのかを正確に伝えてくださった、翻訳者・通訳者の望月紀子さん、黒澤多佳子さんにも感謝致します。

一般国民にもっとも親しまれている媒体であるテレビとしては、ニュース以外に唯一まともに取材して取り上げたＮＨＫの「クローズアップ現代」が、ダーチャ・マライーニの民間人抑留所の体験についても、「宮澤・レーン事件」の無惨で愚かな犠牲についても描けていなかったことは実に残念と言わなければなりません。コメンテーターとして、多くの情報や資料を提供した小宮さんを疎外して、NHK の在日外国人の感性を扱った番組の司会（私もよく見ている）で評価されているが、戦時中の敵国民間人抑留について全く知らなかったことを隠そうともしていない劇作家を起用したことは、理解に苦しむと同時に、内部的な忖度だったのかとさえ疑ってしまいます。「戦争を知らない世代の制作者」であるが故に、テーマに対するジャーナリスティックな感性が不足しているのではないかと思いました。

最後に、国民に多大な犠牲を強いた戦争が日本政府・軍部の「過ち」であったことを認め、その責任を追及する言動を牽制しようとする動きがあることに、危機感を感じます。宮澤弘幸をスパイとして投獄するような感覚が消えてはいない日本社会です。敵国人でありながら日本に残り続けた、外国人教師たちの官舎を跡形もなくしてしまったばかりか、そこに小さな記念碑を建てることさえ許可せず、冤罪で４年間も投獄され、退学となった宮澤弘幸の名誉回復の要求に応じようともしない北海道大学当局にも深く失望します。

いずれにしろ、多くの興味深い同窓の士と出会い、このような意義深いイベントの一端に関わる機会をいただいたこと、「宮澤・レーン事件を語り継ぐ北大ＯＢＯＧの会」の泉定明先輩、ダーチャさん招聘を思い立ち実現させた札幌の奥井登代さんに感謝致します。そして、ダーチャさん来日前の資料集だけでなく、今回も人間として、文学者として秀逸なばかりか、稀有な角度から日本と日本人を知る、イタリア女性のダーチャ・マライーニの言動をこのような報告集として記録に残して下さった翻訳/通訳担当の、望月紀子さん、黒澤多佳子さん、編集制作担当の福島清さんに感謝いたします。

北海道大学の責任を曖昧にしてはならない　　福島　清・毎日新聞活版ＯＢ

「6 月 12 日ダーチャさん歓迎・交流会」で配布の「プログラム・参考資料」に続いて、この報告集の編集も担当した。感じたことをまとめておきたい。

最初に今回、ダーチャさん来日を企画・実行された「ダーチャ・マライーニを日本に迎える会」の皆さんに敬意を表します。これを受けて、東京でのダーチャさん歓迎・交流会を成功させた代表の泉定明さんと実行委員の皆さまの努力を讃えます。

今回の交流会開催にあたって、2008 年に発足したという「ＰＯＷ研究会」の存在と活動を知った。同会は昨年 12 月、20 年かけて調査した結果をまとめて『捕虜収容所・民間人抑留所事典―日本国内編』を刊行した。来年は敗戦から 80 年。「負の歴史を繰り返さないため、詳細な記録を掘り起こす」との基本方針に基づく活動は意義あることだと思う。

しなしがら一方、ダーチャさんに対する北海道大

学の対応は、まったく言語道断と言わざるを得ない。泉定明さんの総括によれば、北大は、ダーチャさんとの会談について、「＜時間制限・人数制限・写真録音禁止・記念碑建設の話題なし＞との事前の条件」をつけたという。

こうした無礼な対応に対して、同席した翻訳家・望月紀子さんは「大切なのは今回の彼女の旅のメインの北大副学長との会見で、ダーチャさんが、頼んだことをきちんと話してくれたことです。ダーチャさんは『私は言うべきことを、ちゃんと話しましたよ』と言ってくれました。この勇気こそきちんと記録が残るようにして下さい」と語っているという。

この一事は、おそらく今回が最後の訪日になるかもしれないダーチャさんの訪日の目的が何であったのか、そして宮澤弘幸への弾圧を阻止できなかった反省のかけらもなく、戦後も一貫して肝心では口をぬぐってきた北大が今なお「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」に正面から向き合おうとしない本音を証明したのではないか。北大ＯＢの皆さんにとっては不快かもしれないがそう感じている。

＊

私達毎日新聞ＯＢがなぜ「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」に関わってきたかについて一言記しておきたい。何よりも、結節点は、国家権力による冤罪は許せないという強い怒りだった。きっかけは先輩ＯＢの一人が宮澤弘幸の妹夫婦と家族ぐるみの交流を持った縁に始まるが、受難の原因が国家権力による犯罪と知って、有志が、被害者の復権と冤罪の真相糾明を呼びかけたところ、一気に共感が広がり、同じ思いでいた北大ＯＢの山本玉樹さんらとも連絡がなり、2013 年 1 月に札幌で「北大生・宮澤弘幸『スパイ冤罪事件』の真相を広める会」の結成に至った。国家権力による犯罪という点では、外国人残虐抑留とも重なっている。会結成以降の活動は同会ホームページですべてを公開しているので参照されたい。

http://miyazawa-lane.com/

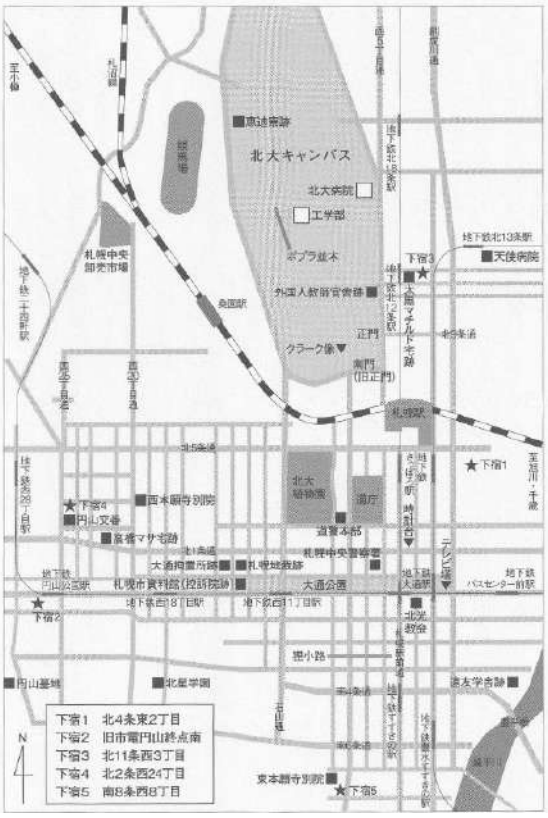
＊

ダーチャさんに対する北大の対応を通じて、もう一点考えるべきは、なぜ北大は特高に検挙された戦前の当時も、戦後も、肝心部分で宮澤弘幸について無視同然の扱いを重ねてきたのかである。

上田誠吉弁護士は、1987 年刊行の『ある北大生の受難―国家秘密法の爪痕』の「あとがき」で、最初に徹底した調査をした北大教員の山本玉樹さんの名前を記して感謝している。さらに 1988 年刊行の『人間の絆を求めて―国家秘密法の周辺』では、1987 年 7 月 9 日に開催された札幌弁護士会主催「国家秘密法に反対する市民集会」にフォスコ・マライーニが寄せた「宮澤弘幸の思い出」と題するメッセージを紹介している。フォスコは「弘幸は決してスパイではなかったのです。私は彼の、優れて独立心の強い性格が、自分の立場を危うくしたのではないか、と思います」と書いているのだ。

さらに 1993 年 12 月、ビデオプレス社が『レーン・宮澤事件―もう一つの 12 月 8 日』と題した VHS を制作発行した。ここではフォスコ・マライーニが涙ながらに宮澤弘幸を回顧する場面をはじめ、広範囲に取材した当時の関係者の貴重な証言が記録されている。

1980 年から 1990 年代にこうした連帯を呼びかける行動があったにも関わらず、北大内部では宮澤弘幸への弾圧の真相を糺し、反省を込めて公開する行動は組織されなかった。2014 年 5 月 7 日の「真相を広める会」との交渉で、北大はようやく宮澤弘幸の名誉回復へ一歩踏み込んだ対応をした。今回のダーチャさんに対する北大当局の無礼は、それらが本心ではなかった証明ではないだろうか。



札幌市市街図と宮澤弘幸が札幌市内を転居した軌跡。（花伝社刊「引き裂かれた青春」から）

＜総括に代えて＞

ダーチャさん訪日から受け取ったこと

泉　定明　「ダーチャ・マライーニさん歓迎交流会・東京」実行委員・代表

１．はじめに

（１）ダーチャさん招聘計画の発端

北大では戦前、外国人教師官舎で外国人教師と学生たちが交流する親睦会「心の会」活動が行われていた。特高はこの国際交流を敵視し、宮澤弘幸と米国人レーン夫妻らを「軍機保護法違反」で検挙し、大審院は暗黒裁判で有罪とした。宮澤は戦後解放されたが、過酷な獄中暮らしで得た病の為 1947 年に 27 歳で亡くなった。所謂「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」である。

「心の会」と「事件」を記憶し伝え続ける活動をしてきた「宮澤・レーン事件を考える会」は、外国人教師官舎跡に記念碑設置を大学に求めているが、拒否されている。この膠着状態を打開する一助として、当時官舎に一家で在住していたイタリア人有名作家・ダーチャさんを招き、大学経営陣と会見して、記念碑建立の重要性を発言してもらうことを発案し、札幌で「ダーチャ・マライーニさんを日本に迎える会」を立ち上げ、募金活動を行い、日本への招聘を計画した。

ダーチャさんは、（2024 年）6 月 11 日に来日し、19 日までの間に東京・名古屋・札幌で講演・会見をすることになった。東京では 6 月 12 日墓参と交流会を予定した。

（２）東京での開催準備

（2024 年）2 月 23 日に開催された『宮澤・レーン事件から考える集い』に参加された「迎える会」担当者から、「来日成功のため御支援をお願いします」旨の文書の参加者への配布と協力要請があったが、突然のことであり、泉が連絡役を申し出ただけだった。

4 月 24 日、泉が呼びかけ、集まった人だけで実行委員会を開催した。大我晴敏、平田更一、向山征哉、村瀬喜之、湯原宏（以上、北大ＯＢ）、黒澤多佳子（イタリア語通訳）、寺沢玲子（登山家・山岳ジャーナリスト）、西里扶甬子（ＰＯＷ研究会）福島清（毎日新聞活版 OB）＝敬称略。泉が実行委員会代表として対応することとし、資料作成は福島担当とした。

以後は、メール・電話等で実行委員の皆さんと連絡をとりながら準備を進めた。

（３）東京での歓迎・交流会準備と開催経過

【歓迎・交流会当日の経過】　6 月 12 日午前 11 時より向山さんがまとめ役となり会場の机配置、大我さんが参加者受付の設営等が始まった。宮澤一家が眠る供養塔には、湯原さんが準備してきた供花・線香を備えた。福島さんが配布資料集を持ち込んだ。広島から、宮澤弘幸氏の姪・福原恵美さんも到着した。

12 時。ダーチャさんが、背筋をピンと伸ばした確かな足取り、そして涼やかにして上品な服装で、山門をくぐり到着された。福原さんが歓迎の挨拶の後、供養塔前に案内した。ダーチャさんはお花と水を供えて、静かに手を合わせた。

13 時。常圓寺地下のホールで歓迎会・交流会を開催した。参加者は、「宮澤・レーン・スパイ冤罪事件」を語り継ぐ行動を毎年行ってきた北大ＯＧＯＢ会員、毎日新聞ＯＢの他、新たにＰＯＷ研究会（戦時の強制収容所に関する研究会）会員、東大イタリア語研究科先生・学生、旭川生活図画事件を追及してきた東芸大教員・学生など総勢 78 名。マスコミは、11 社が取材にあたった。

交流会は、予めダーチャさんへ届けた質問に回答するという形で、黒澤多佳子、渡辺祥子さんの通訳により行われた。ダーチャさんは、歴史・文化観、文学等多岐にわたる 7 項目の質問に対して 1 時間半の間、メモを見ることなく淀みなく、まっすぐ聴衆を見つめ、力強く、だが落ち着いて話し続けた。奥深い知性が醸成されてきた彼女の人生が十分受け取れるものであった。発言内容は、「（４）ダーチャ・マライーニさん講演」を参照されたい。

２．ダーチャさん訪日の意義と課題

今回のダーチャさん訪日について、私はきわめて

大きな意義があったと考えている。以下、率直な感想と問題提起をしたい。

だが先ず、マライーニー家に、戦時中、国家・特高が、非道といえる加虐を犯し、特に幼いダーチャさんの心を大きく傷つけたことを深くお詫びしたい。

（1）「記憶」と「心の軸」の大切さ

ダーチャさんが高齢に関わらず訪日を決意した動機は、大きい兄のような付合いで心優しい学生だった宮澤弘幸さんが被ったスパイ冤罪事件を忘れさせないための記念碑建立に役立ちたい、と考えたからと思う。同時に、戦争の残酷さに対して危機感が薄い日本人に対して、「記憶」と「心の軸」の大切さを語りたかったのではないかと考える。

昨秋出版した『Vita mia（わたしの人生）』の中で、「日本でのさまざまな体験が自分の原点」と語っている。つまり幼かったダーチャさんの心を抉った戦時日本のおぞましい加虐を行った官憲がいた一方で、そうした状況下でも優しく付き合ってくれた市井の人がいたことを通じて、人間には両面性が同時に存在することを実感し意識に留めている。彼女の認識論に時々現れる「俯瞰的に物事を見る眼」は、このときに養われていたと言えるのではないだろうか？

そして同書執筆の契機として、「これまで語ることのなかった辛く苦しい日本での経験を、世界中にあらゆる形の暴力と憎悪が再び溢れる今、証言しなければならないと思ったのです」と語っている。

だが単に「辛く苦しい日本での経験」を語りに来たというのではないだろう。今世界が互いに、サスペクト（猜疑心）に囚われ、変になってきている。だがサスペクトに囚われ加害に走るのは権力者並びに従属者であり、多くの市井の人々はしっかりとし、生活を続けていたことを戦時下の日本で経験した。「権力に対抗できるのは、市井の自立した人々の精神」だと語り伝えるために来日したと受け止めたい。

強制的権力・体制の仕組みとその下での人間の弱さと強さの両面性を理解し、再び渦に無自覚的に巻き込まれぬよう自らに、周囲に語り継ぐことが、ダーチャさんが熱を込めて我々を見つめながら語りかけてくれたことへの最大の返礼であると考える。「未来というものは記憶をベースに作られてゆく」ということや「軸を持つことが大事。そのためには、いろいろな方面から情報を集め、状況を判断し、考えることが必要」と語ったことは、皆に十分伝わった筈だ。

（2）絶対的な支配力を持つ機構はあってはならない

政治哲学者・ハンナ・アーレントは、ナチス親衛隊将校・アイヒマンについて「凡庸な人間」であり「全く思考していないことが、彼があの時代の最大の犯罪者の一人になる素因だったのだ」と書いている。ダーチャさん達を監視して意地悪と悪行をした官憲も、「宮澤レーン事件」で拷問し罪の捏造をした特高も「凡人」であり、家庭では「良き夫」であったであろう。人は、「全く思考せず」機構に飲み込まれ、その中で安楽に過ごし易い者ということだ。それ故ダーチャさんは、「それは今でも繰り返されていることであるが、ある存在が絶対的な支配力を持つ機構を許してはいけない」と述べた。

ダーチャさんの小説・寓話等や、現在の理念の有り様を考えると、「閉塞で不自由な環境の中で落ち込まず生き、気持ちも実人生もどう乗り越えてゆくか」を追及し、実践してこられた事が分かる。与えられた閉塞状況を切り破り、自立する姿に人間の尊厳を見ている。その自立を支えるのは勇気であると物語る。

交流会参加の女子学生の「今、私たちは何をしたらよいと思うか」との質問に、「情報を広く沢山集め、それを材料に、多面的に考え実行することです」と返答し、力を与えてくれていた。

（3）「のちの世代に対して持つ責任」の重要性

ご両親の信念、行動、家族教育のことも多く語った。イタリアが連合国に降伏した後、ナチスの庇護の下で樹立したファシズム政権への忠誠宣誓を別々の場で求められた父母が各々共に拒否し、収容所送りを甘受した。両親とも強い信念を示したのだ。収容所内では、父上・フォスコさんは特高の嘲りに対し、人間の尊厳を主張し、特高の目の前で鉈による“指切断”という行為で官憲を委縮させ、不当な扱いを改めさせ、同胞を勇気づけた。尊厳と信念を守るためには、身を挺してもやるべきことをやる大切さは、ダーチャさんに大きな印象を与えた筈だ。父母は教科書が無い中で、家庭教育を施し、自分たちの考えを伝えている。

多くの作品で、ダーチャさんは、虐げられていることを描くことよりも、いかに「勇気」を持って自立していくのかを描いている。それは、両親たちの姿から受けた教えだったのではないか。両親がダーチャさんに与えた「心の軸を持つ」養育が、立ち向かう相手・共感を寄せる相手を間違えないで、自己の考えを発言する勇気を形作ったと知った。一方、宮澤弘幸は、特高に睨まれることであっても、自己主体性を信じ外国人と交流し、検挙後も交流意義を主張していたに違いない。故に他に例を見ないほどの重罪だったのだろう。フォスコ、ダーチャ、宮澤弘幸には「勇気」が、共通して流れていると感じ取れる。

かつて日本にもあった、親から子へのモラル伝達が、戦後の都市化・核家族化・個室化・スマホ隆盛化の中でどんどん忘れられている。考えさせられることだ。

（４）自己の心の軸の築き

ダーチャの話を聞きつつ、ヨーロッパの知識人と日本人との違いを感じた。ダーチャは少女期の体験の中で、サディスティックな虐待をする群れと、人間的優しさで接してくれた群れを分別する、社会科学的な目を持っていた。ダーチャの文学作品が、単に襲い掛かる悲劇を嘆くことだけを描いているのでなく、次の時間にそれを克服する対処に向かっている姿を描くのは、この社会科学的認識を自分の中に築いていたからであろうと思った。

日本との相違点に驚いた。一般的に日本人は、被害のみを語る。被害を受けたことは、嘆きとなって終わっている。あるいは被害そのものを隠してしまう。（被害に遭ったこと自体が恥となる）。加害についての言及はないので、加害は朦朧となり消えてしまう。被害・加害の事実を語る者は偏屈者と言われ、静寂主義を好む国民から弾かれる。

現在、日本でも他国でも危険な状態が目につく。特に、日本国民の気質は同調や曖昧さを求めるので、人々が空気を読んでいるうちに、いつの間にか権力に自由を奪われ易いと思う（笑顔のファシズム）。「多数の意見に異論をはさまない」「雰囲気に同調する」「自分の意見を言わない」という風潮を自分でも乗り越え、集団自体を変えるにはどうしたらよいだろうか？同じ考えが求められる集団において、意見を述べる人は排除される。集団はその人を、「変わり者」であり、無視してよい排除した放浪者と見る。排除されても平気との“勇気”があれば気が楽になる。それが鍵であり、スタートポイントである。放浪者は、人々が不条理と思っていること、人々が欲しいと思っていることを拾い易い位置にある。やがて、それは自分の考えにまとまり、事実に裏打ちされた軸になり、人々は次第に、“主張する預言者”を興味ある人として捉えて来る。面白いと周りに集まってくる。主張していることが変なことでなくなり、広まってゆく筈だ。キリスト伝道者パウロやヤコブもやったことだ。キング牧師の公民権運動。マンデラのアパルトヘイト撤廃。日本近世では、内村鑑三の無教会主義、田中正造の足尾鉱毒事件が。

ＮＨＫ朝ドラ「虎に翼」の女性弁護士誕生、ダーチャ達のやったフェミニズム運動。例を挙げればきりがない。

（５）「言うべきことを言う勇気」―北大との会見

ダーチャさんは、＜時間制限・人数制限・写真録音禁止・記念碑建設の話題なし＞との事前の条件があった北大経営陣との会見で、「私たちは消費文化の時代において、大切なものを忘れてしまいがちだ。しかし、**忘れてはならない記憶がある。それが宮澤・レーン事件であり、「心の会」である。ぜひそれらを具体的な形のあるもので残し、後々の人がそれを見て思い出し、語り合えるようにしていただきたい」**と毅然とした発言をしたという。ヨーロッパ・インテリの面目躍如を見た思いをした。

同席した翻訳家・望月紀子さんは、「大切なのは今回の彼女の旅のメインの、北大副学長との会見で、ダーチャさんが、頼んだことをきちんと話してくれたことです。ダーチャさんは『私は言うべきことを、ちゃんと話しましたよ』と言ってくれました。この勇気こそきちんと記録が残るようにして下さい」と伝えてくれた。

ダーチャさんは「記憶を涵養し、良心を育て、その先にこそ未来があります。戦争に抗う手段の一つが過去の記憶です」と別の場で言っている。

ダーチャ・マライーニさんの交流会・歓迎会に準備・参加・関心を持っていただいた皆様、ありがとうございました。　　（2024 年 8 月 15 日記）

（7）マスコミ報道

◆2023 年

The Mainichi(毎日新聞英語版)　2023 年 12 月 16 日
Italian writer Maraini called to speak on student falsely accused of WWII spying in Japan
（イタリアの作家マライーニは、日本で第二次世界大戦のスパイ容疑で濡れ衣を着せられた学生について講演するために呼ばれた）https://mainichi.jp/english/articles/20231215/p2a/00m/0na/025000c

◆2024 年

読売新聞オンライン　2024 年 6 月 9 日
「宮沢・レーン事件」イタリアの著名作家ダーチャ・マライーニさん
83 年ぶりに札幌へ　16 日北大農学部で講演　　土田浩平
https://www.yomiuri.co.jp/local/hokkaido/news/20240608-OYTNT50230/

北海道新聞　2024 年 6 月 12 日
「宮澤・レーン事件」〝最後の証人〟来日　マライーニさん　16 日、北大で講演　　内山岳志
https://www.hokkaido-np.co.jp/article/1023981/

中日新聞　2024 年 6 月 12 日
戦禍の交流　記憶たどって　豊田　伊の作家、収容された寺訪問

朝日新聞　2024 年 6 月 14 日
語る「絶対権力は人を残酷に」イタリア人作家が語る日本での収容所体験　　関口佳代子

毎日新聞　2024 年 6 月 15 日
「敵ではなく友だった」名古屋で抑留生活送った伊の作家　戦禍の親交、豊田・広済寺で再会／愛知
真貝恒平　　https://mainichi.jp/articles/20240615/ddl/k23/040/118000c

毎日新聞・愛知版　2024 年 6 月 15 日
戦禍の親交、豊田・廣済寺で再会

朝日新聞・三河版　2024 年 6 月 15 日
名古屋で抑留　伊の作家、跡地など訪問　「何も残っていない　形残すこと大切」　前島慶太郎

毎日新聞・北海道版　2024 年 6 月 17 日
なぜ裏切りになる…外国人との交際　宮沢・レーン事件　親交の作家講演　北大　　片野裕之

北海道新聞　2024 年 6 月 17 日
外国人と交流なぜ罪に　宮沢・レーン事件「冤罪」証言　マライーニさん北大で講演　　山中龍之介

読売新聞オンライン　2024 年 6 月 17 日
「記録残す努力大切」…伊の作家ダーチャ・マライーニさん、８３年ぶりに北大へ
https://www.yomiuri.co.jp/local/hokkaido/news/20240616-OYTNT50189/

北海道新聞　2024 年 6 月 18 日　　＜卓上四季＞
ダーチャさんの言葉

ＮＨＫ北海道 NEWS WEB　2024 年 6 月 20 日
宮澤・レーン事件“生き証人”イタリア人作家語る
https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20240620/7000067852.html?fbclid=IwY2xjawE_1-lleHRuA2FlbQIxMAABHVgMuXzg6SE7jK86GBixkgkk0lcQm9T3_sLR19D2RW3zDJzgl3I8A55CGw_aem_325I_k2Epj2j_4OPK6P-kA

週刊金曜日　2024 年 6 月 28 日
作家ダーチャさん来日　「冤罪」の宮澤さんを追悼　　植村隆

中日新聞　2024 年 6 月 29 日
絶対的な支配 許してはいけない　イタリアの作家ダーチャ・マライーニさん　　世古紘子

毎日新聞　2024 年 7 月 2 日
“ひと”日本での抑留体験を持つイタリアの作家　ダーチャ・マライーニさん（87）　明珍美紀
https://mainichi.jp/articles/20240702/ddm/012/070/050000c

日刊ベリタ　2024 年 7 月 9 日
イタリアの作家ダーチャ・マライーニさん来日　戦時中の弾圧語り「分断される世界」に警鐘鳴らす
www.nikkanberita.com/read.cgi?id=202407091055422

ＮＨＫ北海道 NEWS WEB　2024 年 7 月 11 日
宮澤・レーン事件〝生き証人〟イタリア人女性が来日
https://www.nhk.or.jp/hokkaido/lreport/articles/300/103/53/?fbclid=IwY2xjawE0oHpleHRuA2FlbQIxMQABHR6huwt9QA97MCWK25Gi9yf-GS37Bu2eTwBGB8n84_Z3m5XdEv7RIIUFsA_aem_LMG29Pli9R0eqb0Sow28-Q

朝日新聞デジタル（動画）　2024 年 7 月 12 日

83 年ぶりに札幌を再訪、伊作家がえん罪「スパイ事件」を思う　松尾一郎
https://www.asahi.com/articles/ASS7C0CXLS7CIIPE00HM.html

朝日新聞　2024 年 7 月 18 日
冤罪スパイ事件の地「記憶」再発見　イタリアの現代作家、83 年ぶり札幌の自宅跡へ　松尾一郎

婦人画報　９月号　2024 年 8 月 1 日　ダーチャ・マライーニさんが今伝えたいこと
同上デジタル版（有料会員限定記事）
https://www.fujingaho.jp/culture/interview-celebrity/a61693490/dacia-maraini-240802/

東京新聞　2024 年 8 月 14 日
社説「記憶を育て戦争に抗う―終戦の日を前に」
https://www.tokyo-np.co.jp/article/347369?rct=editorial

毎日新聞デジタル　2024 年 8 月 19,20,21,22 日
戦禍の記憶をたどる旅
① https://mainichi.jp/articles/20240818/k00/00m/040/001000c　真貝恒平
② https://mainichi.jp/articles/20240818/k00/00m/040/002000c　真貝恒平

③ https://mainichi.jp/articles/20240818/k00/00m/040/003000c　片野裕之
④ https://mainichi.jp/articles/20240818/k00/00m/040/004000c　真貝恒平

ＮＨＫ　クローズアップ現代　2024 年 8 月 27 日
終わらない戦争（１）“敵国人抑留”日本が好きだったのに…

ＮＨＫ　クローズアップ現代　取材ノート
ある日突然、私は“敵国人”にされた…
～イタリア人作家ダーチャ・マライーニさんに聞く、日本での抑留～　　内田理沙
https://www.nhk.or.jp/minplus/0121/topic116.html

東京新聞　2024 年 9 月 3 日
視点　私はこうみる　佐藤直子　「敵国」外国人の収容所　記憶を掘り起こす人々

東京新聞　TOKYO Web　2024 年 9 月 3 日
社説・コラム ＜視点＞「敵国」外国人の収容所　記憶を掘り起こす人々　論説委員・佐藤直子
https://www.tokyo-np.co.jp/article/351787

毎日新聞　北海道版　2024 年 9 月 2,3,4,10,11 日
戦禍の記憶をたどる旅　伊作家からのメッセージ
父は小指切断し抗議　飢えや暴言 外国人抑留所の「地獄」　真貝恒平
友と再会 無言で抱擁　疎開先で触れた人のぬくもり　真貝恒平
未来のため「形」残して　83 年ぶり北大へ 冤罪事件「不正義に怒り」片野裕之
「牢獄からの解放」貫く　翻訳家 望月紀子さん語る「異色女性作家」　真貝恒平
北大「負の遺産」発信を　「考える会」幹事・北明さん 記憶の継承模索　片野裕之

毎日新聞　夕刊　2024 年 9 月 11,12,13,17 日
戦後 80 年へ　戦禍の記憶をたどる旅　伊作家からのメッセージ
飢えに苦しんだ抑留　家族で日本へ 一転「敵国人に」＝上　真貝恒平
疎開先の交流 心癒やす　「友として接してくれた感動 今も」＝中　真貝恒二
冤罪の記憶 忘れるな　繰り返さぬよう「形に残して」＝下　片野裕之
同行翻訳家が見たマライーニさん作品　日本での戦争体験 通底＝番外編・真貝恒平

monthly Hokkaido

伊の現代作家、83年ぶり札幌の自宅跡へ

冤罪スパイ事件の地「記憶」再発見

いわれなき弾圧 楽しい日常一変

過った過去 自ら知る大切さ説く

イタリアを代表する現代作家の一人で、ノーベル文学賞候補として名前が浮上してきたダーチャ・マライーニさん(87)が83年ぶりに札幌市北区の北海道大学内の自宅跡を訪れた。特別高等警察(特高)による冤罪スパイ事件「宮沢・レーン事件」の現場だったこの地で、ダーチャさんはレーン家など事件被害者と共に過ごした「記憶」を再発見した。

6月16日。ダーチャさんは「西5丁目・樺川通」に面した雑木林に入り、イタリア語で振り返った。かつて、北海道帝国大(現北大)の教員向け住宅があり、2歳だった1938(昭和13)年12月から4歳だった41(昭和16)年3月まで、家族で住んだ。

樹冠のすき間から見える灰色の空を見上げた。

「私はここに立って、とても感動しています。ここは、これらの木々のおかげで、私にとって大切な過去の多くの記憶を保つことができる場所ですから。私にとって本当にかけがえのない記憶ですから」

同じ一角には、交流サークル「心の会(ソシエテ・デュ・クール)」を主催した米国人英語教師のレーンさん一家も住んでいた。心の会を通じて、文化人類学者の父フォスコ・マライーニさん(1912~2004)や母トパーツィアさん(1913~2015)は、工学部生の宮沢弘幸さん(1919~47)と出会った。

フォスコさんはアイヌ民族を研究しつつ、休日は登山などアウトドアスポーツを宮沢さんと楽しんだ。外出先で宮沢さんはダーチャさんの写真を多く撮り、「澄み切りし青き瞳」をほめ、「なつかしげに(恥ずかしげに)我が名を呼べるイタリアの乙女のすがた、妹のごとし」とアルバムに記した。ダーチャさんは幼かったが、両親に宮沢さんの話を聞いたり、写真を見たりして、宮沢さんを「情愛の深い人」として心に刻み込んだ。

しかし、1941年、そうした日常は終わった。

マライーニさん一家は、フォスコさんが京都帝大(現京大)にイタリア語教師の職を得ると、3月に転出した。そして、約9カ月後の12月8日、真珠湾攻撃。日米開戦のタイミングで、特高は、レーン夫妻と宮沢さんを軍機保護法違反容疑、つまりスパイ容疑で逮捕した。

彼らが話したという「軍事機密」は、宮沢さんが旅行で見聞きした世間話のようなものに過ぎなかったが、3人は懲役15年もしくは12年の有罪を言い渡された。レーン夫妻は刑期途中で米国に送還された一方、宮沢さんは拷問を受け、極寒の網走監獄での収容中に健康を害した。

マライーニさん一家は事件に連座しなかったものの、43年にイタリアのファシスト政権が連合国軍に降伏すると、状況は一転した。ナチス・ドイツがつくった傀儡勢力への忠誠をフォスコさんが拒否したため、日本政府は一家を名古屋に設けた収容所に入れ、空襲を受けた後は現在の豊田市の施設に移した。

収容生活は43年10月から敗戦後の45年8月30日まで続いたが、特高の横暴や、配給食料のピンハネなどで飢えに苦しんだ。フォスコさんが抗議のために左手小指をおので切り落としたり、ダーチャさんらが空腹のあまり生ゴミなども口にしたりせざるをえない生き地獄だった。

日本の敗戦後、宮沢さんもマライーニさん一家も釈放され、再会を果たした。しかし、宮沢さんは歯が抜け、結核を患い、死期が迫っていた。一家は46年5月、イタリアに去った。

9歳までの「大日本帝国」での暗い苛烈な体験が、反ファシズムやフェミニズムに焦点を当てた作品を世に出し続ける作家ダーチャ・マライーニの原点となった。

文学者の工藤正広・北大名誉教授はダーチャさんの作品には「明るい哲学」があると指摘する。「記憶」を将来にいかす「哲学」だという。

◇

ダーチャさんは北大総合博物館も訪れた。展示パネルの写真に両親の姿を見つけると、「とっても若いな」と言った後、「宮澤・レーン事件を考える会」のメンバーらと資料で事実確認をした。

その後の講演会では、「記憶」について聴衆に向けて読み解いた。

「『記憶』を残す大切さというのは、ただ『懐かしかったね』というノスタルジックなことだけではなくて、過去を知ること、聞いて知ること、自分から歩み寄って知ることなのです」

自宅跡に「心の会」とその人々を思い起こすための記念碑がないことに「唯一の抗議」を表明した。

札幌再訪の最終日だった6月19日、ダーチャさんは札幌グランドホテルで記者に言い残した。このホテルは、85年前の1938年12月15日、イタリアから神戸などをへて札幌に着いた時に泊まった場所だ。

「『記憶』はいつも貴重だということ。私たちは、『記憶』なしに未来を創りだすことはできません。『記憶』は破壊することはできません。戦時中に起きたことは私にとってとても大事で、日本やその人々にとっても、何がなされたのかを知ることは大事ではないかと思います。そして、過ちを犯したときには、『我々は過ちを犯した』『今、過ちを認めたい』と言わないとね」

「私はこれらの『記憶』を再発見しました。私は、すばらしいホスピタリティー、兄弟愛、私たちを結びつなぐもの、そして、育まれるべきものを見つけました」

(松尾一郎)

83年ぶりに札幌を訪ねた現代イタリアを代表する作家ダーチャ・マライーニさん。かつての住まいのあった場所は雑木林になっていた=6月16日、札幌市北区の北海道大学

宮沢弘幸さん(左)のアルバムに残る、幼き日のダーチャ・マライーニさん(中央)と、父フォスコさんの写真=北海道大学文書館提供

翻訳家の望月紀子さん(左)と資料を見入るダーチャさん(中央)=6月19日、札幌市北区の北海道大学

東京新聞　社説　2024年8月14日

記憶を育て戦争に抗う

終戦の日を前に

空襲で焼けた街に立つ少女は、イタリアの世界的文学者、ダーチャ・マライーニさん(87)の遠い日の姿＝写真。第2次世界大戦が終わった1945年夏、人類学者で写真家の父フォスコさんが名古屋で撮影した貴重な一枚です。

戦時中、日本で暮らしていたマライーニ一家には終戦までの約2年間、愛知県の外国人強制収容所に収監された経験があります。同盟国だったイタリア人家族がなぜ収容所に入れられたのか。

一家は38年、アイヌを研究するフォスコさんの北海道帝国大（現北大）留学に伴い来日しました。ダーチャさんは当時2歳。札幌から京都に移った41年に日米が開戦し、日本やドイツと三国同盟を結ぶイタリアが連合国に降伏した43年、一家の生活は急転します。

敵国人として強制収容

失脚したムソリーニがナチス・ドイツの支援を受けて北イタリアにファシズム（独裁主義）の政権を樹立。海外のイタリア人も新政権への忠誠を迫られ、自由や人権を尊ぶフォスコさんと母トパーツィアさんは拒んだため、7歳に近かったダーチャさん、日本生まれの妹2人までもが敵国人として名古屋の収容所に送られたのです。

そこは不衛生で、飢えと死の恐怖に苦しむまさに「牢獄（ろうごく）」。冬は室内でも氷点下でした。16人の民間イタリア人がいましたが、官憲に食料を横取りされ、皆、過酷な飢えで栄養失調になりました。

フォスコさんは官憲が捨てた野菜の皮や魚の骨などをあさり、食べ盛りのダーチャさんは石を食べ物に見立てて色を着け、口に含んだと作品に残しています。

名古屋に空襲があった日、ダーチャさんはB29爆撃機と燃える街を見て「ドウシテ、パパチャン、ドウシテ」と言って泣いたそうです。空襲が激しくなり疎開した農村の寺で終戦を迎えました。

ダーチャさんは62年に「パカンス」でデビュー。反ファシズムやフェミニズムに立脚し、「牢獄からの解放」をテーマに小説や詩、戯曲を発表してきました。国家の暴力や性暴力、抑圧された女性や子どもの声なき声を描く原点にあるのは、収容所の体験です。

ダーチャさんは戦後、何度も来日しています。今年6月には「宮沢・レーン事件」の犠牲者で、北海道帝大の学生、宮沢弘幸さんの名誉回復を求める市民の招きで来日しました。

フォスコさんと親しかった宮沢さんは日米開戦の日、米国人の教員夫妻と話したことが軍機保護法違反とされ投獄。戦後釈放されましたがほどなく亡くなりました。宮沢さんの死は、ダーチャさんにとっても消えない痛みです。

全国に延べ約60カ所あった外国人収容所のうち、反ファシズムの人々が集められた一家の収容所では幸い全員が生きて解放されました。自由を取り戻した人々はどんなに喜びに浸ったことでしょう。

ダーチャさん自身は「残忍な官憲はいたが、収容所の外の人は私たちの味方だった。官憲の拷問に屈せず、日本人の乳母は食料を届けようとしてくれたし、寺や村の人は親切だった。だから日本への愛は消えなかった」と語ります。

しかし、日本政府は強制収容した外国人被害者に謝罪していません。宮沢さんにも治安維持法の被害者にも、空襲被害者に対しても同様です。戦後日本は民間人の戦争被害を放置してきたのです。

痛みを顧みない権力者

ダーチャさんは昨年、「Vita mia（私の人生）」を刊行しました。邦訳は今秋に出ます。

ウクライナやパレスチナで起きた新たな戦争の犠牲を避けたい一心で、思い出すのが辛かった収容所の体験を自伝の形で綴ったのです。どんなに痛ましくても忘れられない、後の自分を形成したあの時代を抱きしめるようにして…。

こんな一文があります。

「収容所の恐ろしい体験は心の隅に追いやっておけと本能的に身を守ろうとする声が聞こえます。でもその一方で、別の声がそっと責め立てるのです。語って、思い出して、証言してと」（私訳）

体験者の証言は想像力をかき立て、戦争反対のどんな理論や考察にも勝ると考える作家による、自らを励ますような言葉です。

そして「良心に基づく記憶を育てることが、現代の戦争に抗う唯一の手段です」とも。

権力者は犠牲を強いられる側の痛みを顧みません。新たな戦争犠牲者を生まないために、体験者の声に触れ、記憶を受け継ぎ、犠牲を強いられる側の視点や想像力を養うことが必要です。それは今を生きる私たちの責任なのです。

視点
私はこう見る

2024・9・3　佐藤直子

「敵国」外国人の収容所
記憶を掘り起こす人々

戦前に一家で来日し、大戦中に「敵国人」として名古屋にあった外国人強制収容所に収監された経験を持つイタリアの作家、ダーチャ・マライーニさん(87)が来日した6月、東京で開かれた市民集会で印象に残ることがあった。スピーチした女性が「ダーチャさん、ごめんなさい」と謝ったのだ。市民団体「POW研究会」の小宮まゆみさん(72)。元高校教員で戦時下に全国にあった外国人収容所を30年間調べてきた人だ。

１９４１年12月、日米開戦と同時に、日本に暮らす米国や英国など連合国側の18～70歳前後の男性が全国の施設に収容された。名目はスパイ防止や身柄の保護。開戦時に全国で約30カ所だった収容所は終戦までに延べ約60カ所に増え、延べ約１２００人が収容され、50人が死亡した。

実は女性も収容されていた。小宮さんは90年代、勤務校で戦前、校長を務めた米国人女性が、日米開戦日から特高の監視下に置かれ、後に収容された事実を知り、民間人収容の問題を調べ始めた。

地元横浜にあった神奈川第1、第2抑留所には、全国最多の計93人が収容され、43年に横浜から70キロ離れた旧北足柄村内山（現・南足柄市）の山荘に移転。53人が移され、過酷な生活で栄養失調になるなどして5人が死亡した。

この収容所には貿易商など横浜の外国人社会の中心にいた人が多い。遺族の出羽仁さん(71)の祖父ウィリアム・デュアさんと父シディングハムさんは英国籍の日本育ち。妻や母親は日本人だ。父は医学生だった22歳のときに収容され、日本を愛した青年の苦悩を日記に書いていたことが死後判明。出羽さんは２０２１年、「英国人青年の抑留日記」として出版した。

出羽さんや小宮さん、地元住民らは5年前から内山の収容所跡で、収容所の史実を伝える「語り継ぐ会」を続ける。今年も地元足柄高の生徒も参加して7月に開かれた。

遺族の松下英慈さん(65)は、収容所で病に倒れ、衰弱した体で帰宅して10日後に亡くなった英国人、アーサー・M・カーデューさんの孫。祖父の名を抑留日記に見つけて感動した。「祖父のことをよく知らず、知る手掛かりもなかった。日記を読んで彼の生きた証しを感じた」と語る。

このように戦後80年に迫る今も、埋もれた記憶が市井の人の力で掘り起こされている。

だが肝心の加害国日本政府の態度は冷たい。敵国軍人でもない民間人を収容したのに、米国などのように謝罪していない。強制収容所が過去の問題ではなく、現在進行形の問題だからではないか。

例えば入管。国家は人権を保障した憲法にしばられながら、憲法の理念が及ばない「例外」を設け、自由を奪う。それはスリランカ人ウィシュマさんの死にもつながっただろう。敵視すれば非人間的な扱いも許される。そんな感覚が今も足元にあることにこそ目を向けたい。（論説委員）

飢えに苦しんだ抑留

戦禍の記憶をたどる旅

伊作家からのメッセージ 上

食料を奪われ、路上のアリを口に入れた。激しい飢えから我慢できなかった。不当な扱いを訴えようものなら、特高警察に「喉をかき切ってやる」と何度も脅された。

太平洋戦争末期、イタリアの少女が名古屋市の外国人抑留所で経験した「地獄」は、トラウマとして深く刻まれた。

少女はやがて作家となった。ダーチャ・マライーニさん(87)。フェミニズムや反ファシズムをテーマに小説や戯曲を発表し、ノーベル文学賞の候補にも挙がる。そんな彼女が「今の自分のアイデンティティーの一部になっている」というのが、2歳から約7年間の日本での体験だった。

ダーチャ・マライーニさんの父フォスコさんが(上)アイヌ民族の研究に従事していた北海道帝国大(当時)(下)イタリア語を教えていた京都帝国大(当時)

家族で日本へ 一転「敵国人」に

父、北海道に留学

1936(昭和11)年、ダーチャさんは、イタリア・フィレンツェでフォスコさんの長女として生まれた。日本文化に深い興味を持つフォスコさんは、フィレンツェ大学で人類学を学んだ後、38年に外務省の外郭団体から補助金を取得し、家族を連れて北海道帝国大(現北海道大)に留学する。大学ではアイヌ民族の信仰や儀式などを研究。当時、ダーチャさんは2歳だった。

フォスコさんは41年に京都帝国大(現京都大)にイタリア語の教師として赴任し、一家は札幌から京都に転居。しかし同年12月、太平洋戦争が開戦すると、一家に戦争の暗い影が忍び寄る。43年に祖国イタリアが連合国に無条件降伏すると生活が一変した。

イタリアはそれまでドイツ、日本と三国同盟を締結していた。ところが、ドイツが北イタリアに侵攻し、ファシスト新政府を樹立すると、祖国は分断された。日本はファシスト新政府を支持したが、反ファシストだったフォスコさん一家は忠誠を拒否。「敵国人」の烙印を押され、43年秋に連行されたのが、名古屋市の外国人抑留所だった。

名古屋市天白区表山。小高い丘の閑静な住宅街からは名古屋の街並みを見下ろすことができる。現在は大手企業の社員寮となった地にかつて、フォスコさん一家が収容された抑留所があった。

抑留所にはフォスコさん一家を含め16人のイタリアの民間人が収容された。特高警察の4人に厳しく監視された。自由が奪われた生活の中で最も苦しめられたのが飢えだった。特高が収容者の食料を横流ししていた。

身をもって抗議

極限状態となったフォスコさんらはハンガーストライキに打って出る。だが、全く改善することはなく、フォスコさんは抗議の意思を示すため、自ら左手の小指をおので切り落とし、特高の一人に投げつけた。

ダーチャさんは当時7歳だった。飢え、特高から浴びせられる暴言、父の決死の行動……。これらすべてが脳裏に焼き付いている。そして今、当時を振り返ってこう話す。

「泣き叫んだり、絶望したりするのではなく、逆境にあらがい、勇気を持って困難に立ち向かう。希望を失わないことが生きる力を与えてくれるというのを両親から教えてもらった」

【真貝恒平】

◇

6月に来日したイタリアの著名作家が、幼少期の日本での抑留・疎開体験、戦時中の窃罪事件に巻き込まれた青年との交流について追想し、現代社会にメッセージを送った。

6月に来日したイタリアの作家、ダーチャさん=札幌市北区の北海道大で、片野裕之撮影
ダーチャさんの父フォスコさん=広済寺提供

フォスコ・マライーニ(1912〜2004年)
文化人類学者、写真家。イタリア・フィレンツェ生まれ。1938年に来日し、北海道帝国大(現北海道大)でアイヌ民族の研究に従事。京都帝国大(現京都大)でイタリア語を教えていた戦時中、イタリアの降伏後は抑留生活を送る。終戦後、イタリアに帰国。53年に再来日し、各地を巡り記録映画を撮影した。

ダーチャ・マライーニ
1936年、イタリア・フィレンツェ生まれ。62年に小説「バカンス」で文壇デビュー。63年に「不安の季節」でフォルメントール賞、90年に「シチーリアの雅歌」でカンピエッロ賞を受賞し、海外でも作品が翻訳される国際的作家。昨年11月には、日本で抑留された幼少期を描いた自伝「Vita mia(私の人生)」(未邦訳)を出版。

戦後80年へ

戦禍の記憶をたどる旅

伊作家からのメッセージ

疎開先の交流 心癒やす

今年6月、イタリアの作家、ダーチャ・マライーニさん（87）の姿が愛知県豊田市の豊洞禅寺院、広済寺にあった。深緑に囲まれた寺の本堂に通じる石段を、サングラスをかけたダーチャさんは一段一段、踏みしめながら上っていた。時折立ち止まり、川のせせらぎと鳥のさえずりに耳を澄ました。その姿はこの寺で過ごした遠い日の記憶を取り戻しているようだった。

戦時中に収容されていた広済寺で再会したダーチャ・マライーニさん（右）と加納啓子さん＝愛知県豊田市で6月14日、真貝恒平撮影

「友として接してくれた感動 今も」

戦時中、全国有数の軍需工業地帯だった名古屋市は米軍爆撃機による空襲の標的となった。1945年3月の名古屋大空襲では市中心部が焦土と化した。名古屋の外国人抑留所に収容されていたダーチャさんや文化人類学者の父フォスコさん（12～2004年）ら家族が疎開してきたのが広済寺（当時は愛知県石野村）だった。

寺の孫と仲良く

「ダーちゃん！」。本堂から一人の女性が叫んだ。ダーチャさんとその女性は言葉を交わすことなく、抱き合った。女性は79年前、この寺でダーチャさんと一緒に過ごした加納啓子さん（88）だった。

寺の住職の孫娘だった加納さんは、疎開してきたダーチャさんとすぐに仲良くなった。石蹴りやお手玉で遊び、加納さんは今も、ダーチャさんから教えてもらったイタリアの民謡を覚えている。

45年8月15日、ダーチャさん家族は寺で敗戦を告げる昭和天皇の玉音放送に村人たちと耳を傾けた。古語を交えた文語体による天皇の言葉に、意味がよく理解できない村人もいた。日本の研究をしていたフォスコさんが村人に言葉の意味を教えた。

村人はフォスコさんらに赤飯を振る舞った。そしてこう言葉をかけて祝福した。「あなたたちはもう抑留者ではない。戦争は終わったんです」

9月に家族で東京に移るまで、この寺で過ごした数カ月間について、ダーチャさんは「敵ではなく友として接してくれた感動を今も覚えている。どれだけ癒められたか。政治、イデオロギー、外国人であることを超え、人間として認め合うことができた」と振り返る。

広済寺に疎開していたころのマライーニさん一家。左から3人目がダーチャさん、右端が父のフォスコさん＝広済寺提供

寺の裏山の墓地には、フォスコさんの慰霊碑がある。フォスコさんはどんなに過酷な経験をしても日本を憎むことはなかった。戦後、フォスコさんが文化人類学者、写真家として日本とイタリアの懸け橋となったのは、広済寺での村人との交流があったからだ。91歳で亡くなる直前、フォスコさんは「私の体の一部を寺に納めてほしい」と遺言を残した。

フォスコさんが愛した自然豊かな村の風景を見下ろす慰霊碑には彼の毛髪と爪が納められた。そして、フォスコさんのこんな言葉が刻まれている。

「争いのないメッセージを地球に贈ります」。ダーチャさんが碑に手向けた水が強い日差しに照らされ、その文字はキラキラと輝いていた。【真貝恒平】

冤罪の記憶 忘れるな

戦後80年へ

戦禍の記憶をたどる旅

伊作家からのメッセージ 下

ロシアによるウクライナ侵攻、緊迫化する中東情勢……。愛知県豊田市の広済寺を訪問した日の最後、ダーチャ・マライーニさん(87)は「世界はいま、困難な状況にある。全体主義や強権主義に戻ろうとする空気を感じる」と未来への警告を口にした。

そしてダーチャさんが次に向かった先は札幌市。そこはダーチャさんが1938年、家族とともに日本に来て初めて暮らした地だった。

外国人教員官舎跡で当時を振り返るダーチャ・マライーニさん＝札幌市北区の北海道大で6月16日、片野裕之撮影

27歳学生 犠牲に

「死者はどこにいるかわからないが、私の記憶とつながっている。死者は存在し、対話できる相手なのだ」。そう口にしたダーチャさんの目に浮かんだのは、太平洋戦争が始まった日に、いわれのないスパイ容疑で投獄され、27歳の若さで生涯を終えた宮沢弘幸さんだ。

宮沢さんは北海道帝国大（現北海道大）の工学部生だった時、文化人類学者として同大に留学していたダーチャさんの父フォスコさん(1912～2004年)と知り合った。

交流のきっかけとなったのが、39年6月に宮沢さんら学生が結成した、外国人教員と外国語で討論する「ソシエテ・デュ・クール」（仏語で「心の会」）だった。米国人英語教師のハロルド・レーンさん、ポーリンさん夫妻を中心に週1回程度、外国人教員官舎に集い、フォスコさんも参加していた。

宮沢さんについて衝撃的な知らせが届いたのは、フォスコさんが京都帝国大（現京都大）で教職を得て、北海道から転居した後だった。41年12月8日、太平洋戦争の開戦と同時に、日本の治安当局は「戦時特別措置」の名の下、全国の特高警察を動員してスパイ容疑者の一斉検挙を行った。

外国人と交流する「心の会」はその標的となり、宮沢さんは北海道内の海軍飛行場などの情報をレーン夫妻らに漏らしたとする軍機保護法違反容疑で逮捕された。「宮沢・レーン事件」と呼ばれる冤罪事件である。

ダーチャさんが今回来日したのは、札幌の市民団体「宮沢・レーン事件を考える会」の招待を受けたからだ。「宮沢さんの名誉回復に協力したい」と、自由のきかなくなった体を押して、長い旅に出た。

「軍国主義の政治は、敵を作り出すことで体制を維持する」。41年以来、83年ぶりに訪れた北海道大で講演したダーチャさんは事件の背景をこう説明し、表情を硬くした。そして「私の怒りは不正義に対する怒り。不正義のあるところに私は現れる」と語った。

戦後に釈放された宮沢さんとフォスコさん一家は東京都内で再会を果たす。フォスコさん一家は46年2月に帰国したが、それからちょうど1年後の47年2月22日、宮沢さんは獄中で患った結核が原因で亡くなった。27歳だった。

北海道大の文書館に所蔵されている宮沢さんのアルバムには、年齢の近いフォスコさん一家と一緒にスキーに出かけた時の写真が収められている。アルバムの台紙の余白には、宮沢さんが作ったダーチャさんへの詩が書かれている。

「稚なきダーチャ　なづかしげに我が名を呼べる　イタリアの乙女のすがた妹のごと」

「話しただけで」

ダーチャさんは宮沢さんについて「私たちにとって彼はとても良い友人で、優しい人だった。私たちは彼と話をしていただけなのに、政府は彼を国の敵にしてしまった」と話す。

北海道大での講演の2日後、ダーチャさんは同大正門近くの事務局の一室で山本文彦副学長と向き合っていた。

「私たちには忘れてはならない記憶がある。宮沢・レーン事件と『心の会』について形あるもので残していただきたい」。山本副学長は、外国人教員官舎跡に「宮沢・レーン事件」を伝えるモニュメントを設置するよう要望した。山本副学長は「歴史を学ぶことはよりよい未来、よりよい社会を築くため。おっしゃることは理解できる」と答えた。

戦後79年。ダーチャさんの今回の来日は、戦禍の記憶が薄れゆくことへの強い危機感の表れだった。

「同じ過ちを繰り返さないために、たとえ過去が醜いものであっても、未来を築くため、社会は記憶を保たなければならない。小さな形でも残すことが、過去を自覚するためにも大切だ。私たちはたぶん、もっとやるべきことがある」

【片野裕之】

繰り返さぬよう「形に残して」

外国人教師と学生が交流を深めた「ソシエテ・デュ・クール」（心の会）。手前右端が宮沢弘幸さん、その左横の2人がハロルド・レーンさん、ポーリンさん夫妻。後列左から4人目がフォスコ・マライーニさん＝北海道大大学文書館提供

宮沢・レーン事件

1941年12月8日、北大生の宮沢弘幸さんと英語教師のハロルド・レーンさん（1892～1963年）夫妻が軍機保護法違反（スパイ）容疑で特高警察に逮捕され、懲役15～12年が確定。宮沢さんは終戦後に釈放されたが、47年に病死した。90年代になって、主な容疑は根室に海軍飛行場が存在することをレーン夫妻に話したことと判明。同飛行場の存在は事件前から新聞報道などで広く知られていた。

戦後80年へ

同行翻訳家が見たマライーニさん作品

日本での戦争体験 通底

今年6月に来日したイタリアの作家、ダーチャ・マライーニさん(87)の作品を翻訳してきた望月紀子さん（神奈川県鎌倉市）は、今回の旅に同行した。1970年代にかけてフェミニズムの作家として時代の先頭に立っていたダーチャさんの作品に、望月さんは約40年前に出合った。「彼女の作品に通底するのは『牢獄からの解放』。2歳から9歳まで過ごした日本での戦争体験が作品に色濃く投影されている」と語る。

【聞き手・真貝恒平】

戦禍の記憶をたどる旅

伊作家からのメッセージ　番外編

ダーチャさんは小説、詩、戯曲、評論、童話などイタリア国内で最も多く世界各国語に翻訳されている作家です。私が初めて彼女の作品を読んだのは、82年の秋でした。来日した彼女との対談に備えるためでした。

私がイタリアに滞在していた70年代、彼女は68年に起こったフランスの五月革命に象徴される若者たちの「異議申し立て」に呼応し、時代の先頭に立つ作家でした。私はその後、評論で彼女を「異色の女性作家」と紹介しました。まだフェミニズムには疎遠で、それまで読んでいた一世代前の女性作家たちには感じることがなかった新鮮さを表現したかったのです。

彼女の転機となったのが、64年に米国の黒人解放組織「ブラックパンサー」の女性党員をインタビューしたことでした。ここで彼女はフェミニズムを知ります。70年代には「怒れる女」と呼ばれ、デモの先頭に立ち、抑圧され、声を上げる力のない女性たちの代弁者として作品を書きました。

ダーチャ・マライーニさん（右）と北海道大大学文書館を見学する望月紀子さん＝札幌市北区で6月17日、片野裕之撮影

しかし、私が彼女の作品の翻訳に携わるうちに見えてきたのは、作品を貫く一貫したテーマが「牢獄からの解放」ということでした。そして間違いなくその原風景は、太平洋戦争末期に収容された名古屋の外国人抑留所です。それはフェミニズムを知る以前からの彼女の作品の中心にあったのです。

62年に刊行されたデビュー作の「バカンス」の主人公は14歳の少女で、幼くして牢獄を知った人間の視点で書かれています。98年にその新版が出た際に、少女の年齢は11歳に変更されました。主人公と自分を重ね合わせ、7歳の頃に名古屋で実際に経験した抑留生活に近い年齢にしたのでしょう。

ダーチャさんは序文でこう記しています。「……昔、憎むべき野蛮な戦争に傷ついたひとりの少女がいたとしか言いようがない。彼女は黴の生えた一切れのパンに狂喜するほどの飢えを体験した……」

今回の来日は、北海道帝国大（現北海道大）で起きた「宮沢・レーン事件」を後世に伝える団体の呼びかけに応じて決めました。出発の少し前に足の指の手術を受け、松葉づえをついて歩き、医師からは長旅をとめられていましたが、彼女はヨーロッパの仕事はすべてキャンセルしたのに日本には来てくれました。宮沢弘幸さんの名誉を回復したいという一心だったと思います。

北海道大の副学長と面会した際、外国人教員官舎跡にモニュメントを作ってほしいと頼んだのは、彼女がこの旅で何度も口にした記憶の大切さからです。「ものがなくなると忘れ去られてしまう」と言っていました。名古屋の外国人抑留所もそうですが、建物がなくなると過去が消されてしまうことに危機感を感じているのでしょう。

現在、昨年11月に彼女が出版した自伝「Vita mia」（仮題・わたしの人生）の翻訳をしています。11月に新潮社から刊行の予定です。京都から名古屋の外国人抑留所に向かう場面から始まります。現在の世界情勢を視野に、戦争の悲惨さを自らの体験から描いており、ぜひ読んでもらいたいです。

ダーチャ・マライーニさん　東京歓迎・交流会の記録

２０２４年9月２２日　発行　　非売品

ダーチャ・マライーニを日本に迎える会・東京
【代表】泉 定明・北大ＯＢ（izumi@kxe.biglobe.ne.jp）
大我晴敏、平田更一、向山征哉、村瀬喜之、湯原 宏、黒澤多佳子、寺沢玲子、西里扶甬子
＜編集・制作＞ 福島 清・毎日新聞ＯＢ（misuzuya@jcom.zaq.ne.jp）

＜裏表紙＞
書籍『Vita mia』ダーチャ・マライーニ（2023 Rizzoli)より、写真はフォスコ・マライーニ撮影

＊すべての記事・写真の無断転載はお断りします。

DACIA MARAINI
Vita mia
DACIA
MARAINI
Vita mia
Giappone, 1943.
Memorie di una bambina italiana
in un campo di prigionia.
Rizzoli
La Scala